

探訪マップ

銀の道

1:50,000



銀の道を歩こう

島根県大田市大森の「石見银山」は、1526年に博多の商人・神屋寿禎かみやじゆていによって発見されたと伝えられています。始めの頃、銀鉱石は大森から最も近い仁摩町とものがうら鞆ヶ浦という港から運び出されていました。戦国時代、毛利元就もうりもとなりが银山を支配するようになると、温泉津町ゆのつおき沖泊どまりを利用するようになりました。

江戸時代になって、幕府は银山とその周辺を直接治め、比較的安全となった陸上ルートが使われるようになりました。大久保長安おおくほながやす（初代银山奉行）は、大森から尾道に至るこのルートを整備し、巾7尺（約2.1m）道のり35里（約140km）の輸送路を完成させました。



これが一般に「银山街道」と呼ばれるもので、大森代官所から小原（美郷町粕淵）、赤名峠、布野、三次、吉舎、甲奴、甲山、御調を通過して尾道港へつながっています。馬300頭に人が400人という大輸送隊は、これを3泊4日の行程で銀を運んでいました。

このルート以外に、甲奴町から府中市上下町、福山市新市町、神辺町を経て大阪方面に向かうルートも利用されていたという記録が残っています。近年、沿線の町や村の開発事業によって银山古道の多くが消えつつありますが、道沿いにはまだまだ多くの遺跡が残されています。これらを訪ねながらゆっくりと歩いてみると、さまざまな再発見をすることができます。

さあ、銀の道をみんなで歩いてみましょう。

銀の道探訪マップ①



大田市温泉津町

大田市温泉津町〜萩原編

銀の道は、大田市大森町の大森代官所を起点とし、尾道市まで約一三〇キロの道のりである。毛利氏支配時代は大森から温泉津町沖泊へのルートが、それ以前は海への最短ルートである仁摩町軒ヶ浦への道が利用されていた。沖泊への道は降路坂を越える一二キロのトレッキングコースとなっており、道沿いには多様な遺跡が点在している。尾道へのルートは、五百羅漢の前を通り、上佐摩から萩原をぬけて、邑智郡美郷町との境界へと続いている。

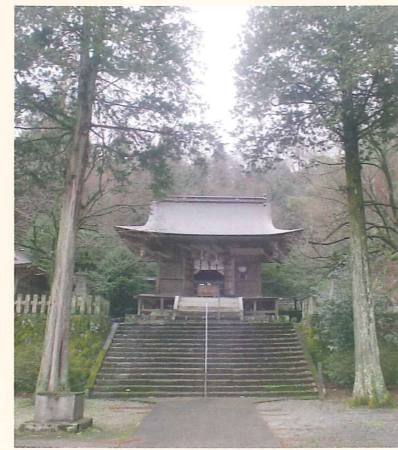
- この区間の主な見どころ
- ・城上神社（鳴き龍天井）
 - ・大森代官所跡（石見銀山資料館）
 - ・熊谷家住宅
 - ・井戸神社
 - ・西性寺（こて絵）
 - ・梅雨左衛門の碑
 - ・大久保間歩（内部未公開）
 - ・龍源寺間歩・降路坂
 - ・金柄杓の井戸
 - ・やきものの里
 - ・内藤家（なまこ壁、水路石垣）
 - ・沖泊（鼻ぐり石、恵比須神社）
 - ・旧河島家住宅
 - ・御銀蔵跡
 - ・五百羅漢
 - ・萩原千軒
 - ・瑞泉寺
 - ・松山の道標
 - ・忠左衛門堂



芋代官さん

俗に「芋代官さん」と愛称される「井戸平左衛門」は、飢饉に苦しむ人々にサツマイモの栽培を勧め、多くの領民を救った。

平左衛門は、もともと武蔵国（今の東京）に生まれたが、一七三一年に六〇才という高齢で大森代官に任命された。その頃は、「享保の大飢饉」といわれる大変な時代であった。平左衛門は、自らの財産や裕福な農民から募ったお金を資金として、米を購入するとともに、幕府の許可を待たずして、代官所の米蔵を開き飢人に米を与えたと伝えられている。



井戸神社

大久保間歩（おおくぼまほ）

数ある石見銀山の間歩（坑道）の中でも、群を抜いて大きいのがこの大久保間歩だ。坑道名は、銀山街道尾道ルートを開発した初代銀山奉行「大久保長安」の名前に由来している。間歩の中は見上げるほど高いところもあり、巡検した役人が馬に乗ったままこの坑道に入ったという話が伝えられている。ただし、充分な安全対策が講じられるまでは、一般公開されない。



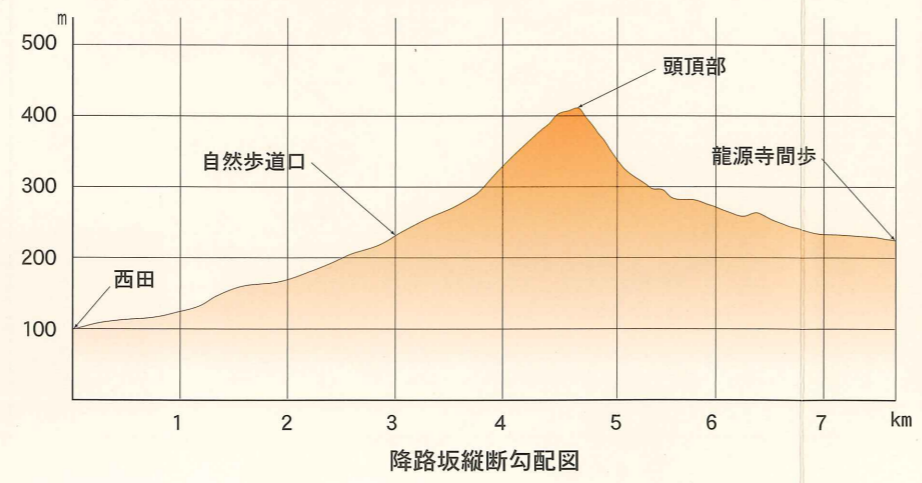
大久保間歩



降路坂から日本海を望む

降路坂（こうろさか）

龍源寺間歩の前を通り、最後の民家を過ぎると銀の道沖泊コース最大の難所、降路坂にさしかかる。周辺の森は杉や照葉樹が広がり、深山幽谷の趣が感じられる。また頂上付近では視界が開けて、日本海さらには遠く日御碕を見ることが出来る。峠には妖怪退治伝説も残っており、西田地区の人たちが祀った、地蔵像の台座跡が確認できる。



降路坂縦断勾配図



天井絵

城上（きがみ）神社の鳴き龍

大森という地名は、この神社の裏山がうっそうとした森であったことから由来しているという。一八一二年に建造された重層式拝殿は、近在ではまれな建築様式。初代銀山奉行「大久保長安」ゆかりの遺物「能面」「熨斗目（のしめ）」などが残る。拝殿の格天井には極彩色の龍が描かれており、その下で手をたたくとリリーンと響き、まるで龍の鳴き声のように聞こえる。

よづくはで

「よづく」とは、鳥のフクロウのこと。四角錐の塔の上で、フクロウが羽を休めているように見えることから、「よづくはで」と呼ばれるようになった。言い伝えでは、神代の昔、西田地区の里人が大風で稲ハデが倒れて難儀しているところ、この地を訪れた「上津綿津美神（うわづわたつみのかみ）」と「上筒男神（うわづつおのかみ）」が、漁網を干す方法を取り入れた、ハデの作り方を教えたことから始まったという。この方法は、狭い面積を効率的に使い、木材が少なくすむ上に、風で倒れる心配が少ない。よづくはでは、高さが約五メートル、一基に稲束が約五〇〇束（五俵分）架けることができる。西田の秋を飾る風物詩として、十月終わり頃から十一月の初めにかけて見られる。



よづくはで

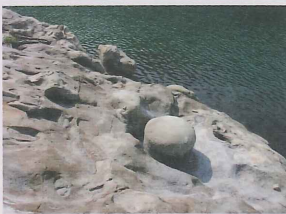
主な連絡先

- 大田市役所 0854-82-1600
- 大田市観光協会 0854-82-2555
- 石見銀山資料館 0854-89-0846
- 町並み交流センター 0854-89-0330
- ゆうゆう館（温泉津） 0855-65-3595
- 石見銀山観光ガイドの会 0854-89-0120

銀の道関連ホームページ

- 石見銀山ホームページ <http://www2.pref.shimane.jp/ginzan/>
- 石見銀山ミュージアム <http://www.iwamiginzan-muse.jp/>

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平18 中復 第150号)



10 鼻ぐり岩
毛利氏支配時代は温泉津沖泊が銀積出港だった。いまでもたくさんの鼻ぐり岩(船を係留する岩)を目にすることができる。



9 内藤家住宅
回船問屋「梅田屋」の建物だった内藤家住宅には、なまこ壁や脛(はしけ)用の水路に残る古い石垣が、当時は彷彿とさせる。



8 松山の道標
産業道路とつながる分岐点に、福光石で造られた古い道標が残っている。「右銀山大森・いづも大社」と刻まれている。



7 金柄杓(かなびしゃく)の井戸
その昔、泉の水の美味しさに感心した大森代官が金製製の柄杓を奉納し、このように呼ばれるようになった。



6 石畳の古道
西田から清水に向かう山道に古い石畳が残っている。この道は尾道ルート開発後も、温泉津港からの物資輸送路として利用された。



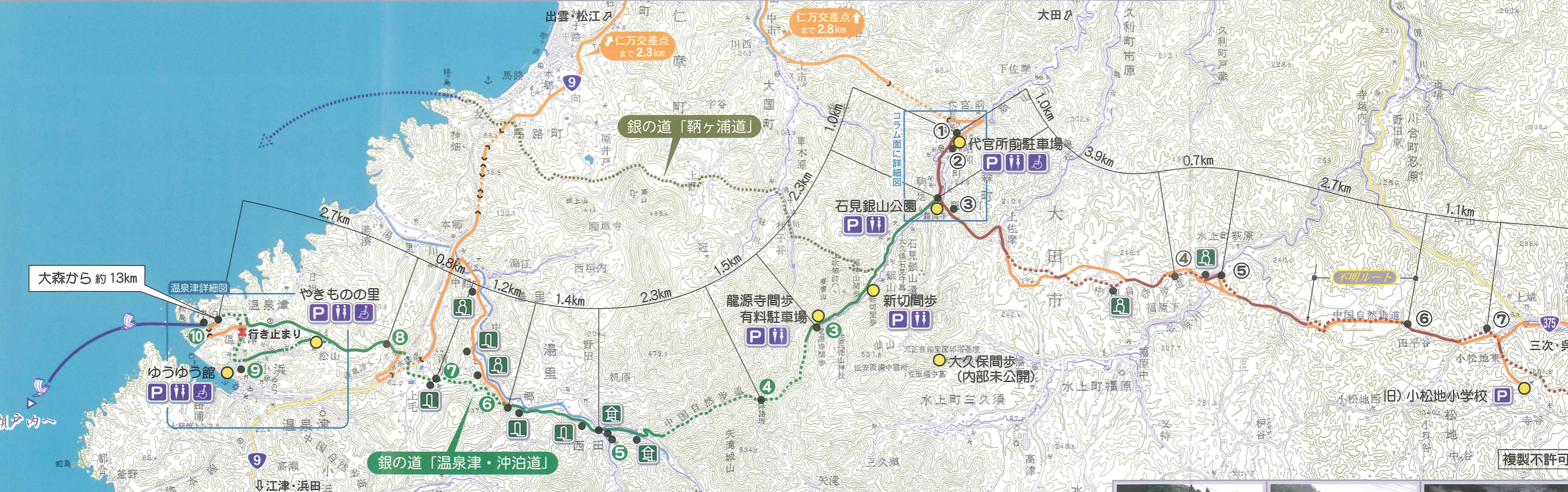
5 瑞泉寺
瑞泉寺12世「自顕師」が吉野葛の製法を伝え、「西田大葛」の名前はますます高まった。街道を行く旅人の土産として重宝されていた。



4 降路坂 (こうろざか)
降路坂の峠には1940年代まで茶店があり、甘酒や茶菓子売られていた。地蔵様が祭られていたという台座が今も残っている。



3 龍源寺間歩 (りゅうげんじまぶみ)
観光用に公開されている坑道跡。この間歩は江戸時代初期に開発されたもの。岩壁にノミ跡が残っている。



凡例

	銀の道 (車) ※1		車輛迂回路
	銀の道 (歩) ※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ (車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道 (道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む (家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。
「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。



1 大森代官所跡
江戸時代、幕府は石見銀山を直轄支配し大森に奉行所(後に代官所)を置いた。現在は石見銀山資料館となっている。

2 熊谷家住宅
街並み保存地区で最大級の商家建築である「熊谷家所(後に代官所)を置いた。現在は石見銀山資料館となっている。有力商人の地位や生活の変遷がわかる。

3 五百羅漢
石窟に安置された五百羅漢像は、江戸時代中期に温泉津町の石工「坪内平七」らによって作られた。地元の福光石が使われている。



4 梅雨左衛門の碑 (つゆざえもんひ)
由来は定かでないが、昔から「腰から下の病」に霊験があると言われ、今でも参拝者が絶えない。

5 萩原(あざわら)千軒
ここは輸送隊最初の休憩地で、当時は宿場町として栄え、「萩原千軒」と呼ばれるほどにぎわっていた。

6 箱茂(はこも)のお松
銀の道はここから邑智郡地へ、当時は宿場町として行く人々の休憩場所、当時の甘藷を導出し、多くの命を救った。周辺の町村に報恩碑が多く建てられている。

7 井戸平左衛門碑
第19代大森代官「井戸平左衛門」は、救荒作物として甘藷を導入し、多くの命を救った。周辺の町村に報恩碑が多く建てられている。

銀の道探訪マップ②



美郷町石原

美郷町小松地、飯南町下赤名編

大森の代官所を出発しておよそ八キロ、大田市と邑智郡美郷町の境界となる所に松の古木が見えてくる。この松を「箱茂のお松」といい、かつては旅人が一休みする場所だった。ここから飯石郡飯南町下赤名まで約二八キロにわたって銀の道の名残を示す数々の史跡が残っている。この区間は街道の形状がそのまま残っている部分があり多く、中でも「八名塩道」と呼ばれる約六キロのコースは、車は通れないが、古道の雰囲気は充分味わえる。

- この区間の主な見どころ
- ・箱茂のお松
 - ・八名塩道（茶店跡、十王堂跡）
 - ・鴨山
 - ・八名塩坂
 - ・石畳のあった坂道
 - ・川番所跡
 - ・石原の古道
 - ・九日市本陣跡
 - ・ふるさとおち伝承館
 - ・橋台岩
 - ・酒谷番所跡
 - ・赤名湿地
 - ・芋代官の碑
 - ・齋藤茂吉鴨山記念館
 - ・小原の河原
 - ・本陣跡
 - ・半駄の峡
 - ・西の原古道
 - ・シャクナゲ
 - ・酒谷の名水
 - ・江戸時代の農家
 - ・長者原古墳



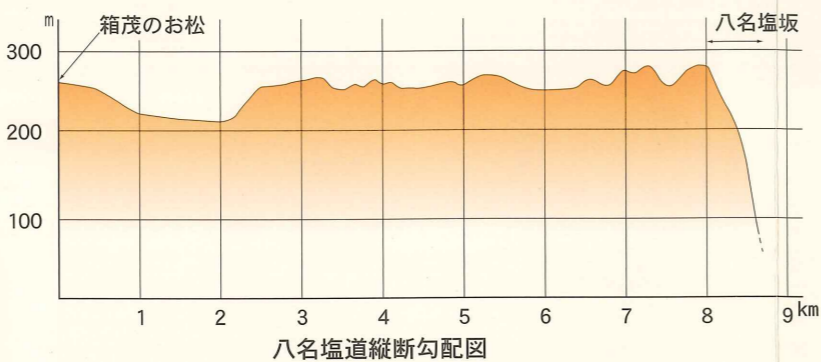
八名塩（やなしお）道

箱茂の松からおよそ二キロ行くと、なだらかな尾根筋に古道がほほ昔のまま残っている。ここから粕淵に向けての山道を地域の人は「八名塩道」と呼んでいる。道の脇には十王堂と呼ばれるお堂の跡や茶店らしき建物の跡が残っており、かつては街道の要衝として賑わっていたことが想像できる。



発掘調査が行われた八名塩道

八名塩道に関しては一三五四年の古文書に記述が見られ、江戸時代以前にはすでに存在していたことが確認できる。尾根すじの道を小原の宿に向かってしばらく進んでいくと、一転して急な坂道を下っていくことになる。ここが街道の難所として知られた「八名塩坂」で、あまりにきついため荷物運びの人足賃の割り増しが認められていたという。



人麻呂伝説

万葉の歌人、柿本人麻呂死亡地については様々な説があり、謎が多い。最近では哲学者の梅原猛氏が益田市沖に沈んだとされる鴨島をその地としている。この周辺ではアララギ派の歌人、斎藤茂吉が唱えた「鴨山説」が良く知られている。



鴨山

「鴨山の巖根し巻けるわれをかも知らにと妹が待ちつつあらむ」

という人麻呂の和歌に出てくる鴨山という地名が美郷町湯抱（ゆがかい）の奥にあったことを根拠に、人麻呂の死亡地は美郷町であると彼は結論づけている。



齋藤茂吉鴨山記念館



湯抱温泉



華谷生誕地の碑



原田屋の石垣

佐和華谷（さわかく）

江戸時代に儒者として活躍した華谷は、一七四九年に九日市の本陣である原田屋で生まれている。多感な青年時代に遊学し画を中林竹洞に学び、この時期同じく京都に遊学中であった頼山陽らとも交友した。また日本地図を作成した伊能忠敬が、文化八年に測量調査でこの地方を訪れた際、わざわざ原田屋に立ち寄り華谷を訪ねている。その時華谷は留守で、会見はかなわなかったという。儒者としての華谷は、華齋、五鹿洞などの号をもつが、通称は原田屋庄太郎といい、その名前で大森町の五百羅漢の内一体を寄贈している。

江の川舟運

江の川の勾配は意外と緩い。河口からおおよそ一〇キロ上がった三次あたりで、標高はわずかに一〇メートルだから、河川勾配はおおむね千分の一となる。このことは江の川に舟運のルートと輿地まで発達させる大きな要因となった。舟運がいつ頃から始まったのかは不明だが、中世には流域全体に広がっていたと思われる。江戸時代までは石見銀山からの抜け荷を監視する川番所があったため、三次から江津まで全域を通して行き来する舟はなかったと見られている。明治になって、藩を越えて交易することが可能になり、舟運は急速に発展することになった。主に上流域では小舟、下流域では大船が使われた。明治二〇年代の船籍を見ると、大船は口羽から粕淵に多いことがわかる。



明治20年代の船籍図



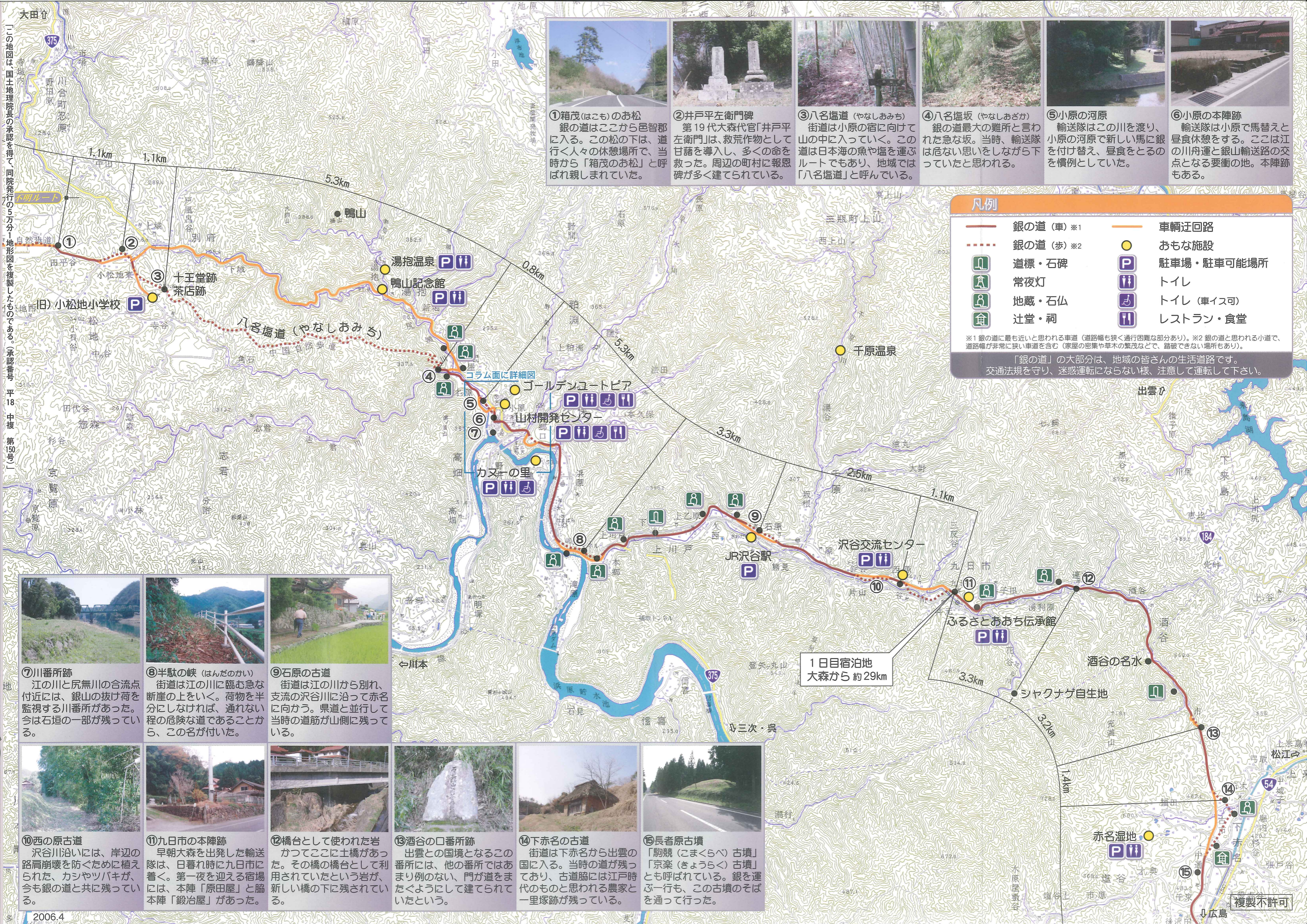
かつて江の川舟運で活躍した大舟

主な連絡先

- 美郷町役場 0855-75-1211
- 美郷町教育委員会 0855-75-1217
- 美郷町観光協会 0855-75-0805
- 齋藤茂吉鴨山記念館 0855-75-1070
- 沢谷交流センター 0855-75-1920

銀の道関連ホームページ

- 石見銀山街道「九日市宿」
<http://ryoutettan.com/rekisi-ginnzannkaidou.html>
- 江戸時代島根の街道
<http://www.pref.shimane.jp/section/rekimichi/index-g.html>



①箱茂(はこも)のお松
銀の道はここから邑智郡に入る。この松の下は、道行く人々の休憩場所で、当時から「箱茂のお松」と呼ばれ親しまれていた。



②井戸平左衛門碑
第19代大森代官「井戸平左衛門」は、救荒作物として甘藷を導入し、多くの命を救った。周辺の町村に報恩碑が多く建てられている。



③八名塩道(やなしおみち)
街道は小原の宿に向けて山の中に入って行く。この道は日本海の魚や塩を運ぶルートでもあり、地域では「八名塩道」と呼んでいる。



④八名塩坂(やなしおさか)
銀の道最大の難所と言われた急な坂。当時、輸送隊は危ない思いをしながら下っていたと思われる。



⑤小原の河原
輸送隊はこの川を渡り、小原の河原で新しい馬に銀を付け替え、昼食をとるのを慣例としていた。



⑥小原の本陣跡
輸送隊は小原で馬替えと昼食休憩をする。ここは江の川舟運と銀山輸送路の交点となる要衝の地。本陣跡もある。

凡例

	銀の道(車)※1		車輛迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。



⑦川番所跡
江の川と尻無川の合流点付近には、銀山の抜け荷を監視する川番所があった。今は石垣の一部が残っている。



⑧半駄の峡(はんだのかい)
街道は江の川に臨む急な断崖の上をいく。荷物を半分にしなければ、通れない程の危険な道であることから、この名が付いた。



⑨石原の古道
街道は江の川から別れ、支流の沢谷川に沿って赤名に向かう。県道と並行して当時の道筋が山側に残っている。



⑩西の原古道
沢谷川沿いには、岸辺の路肩崩壊を防ぐために植えられた、カシやツバキが、今も銀の道と共に残っている。



⑪九日市の本陣跡
早朝大森を出発した輸送隊は、日暮れ時に九日市に着く。第一夜を迎える宿場には、本陣「原田屋」と脇本陣「鍛冶屋」があった。



⑫橋台として使われた岩
かつてここに土橋があった。その橋の橋台として利用されていたという岩が、新しい橋の下に残されている。



⑬酒谷の口番所跡
出雲との国境となるこの番所には、他の番所ではあまり例のない、門が道をまたぐようにして建てられていたという。



⑭下赤名の古道
街道は下赤名から出雲の国に入る。当時の道が残っており、古道脇には江戸時代のものと思われる農家と一里塚跡が残っている。



⑮長者原古墳
「駒競(こまくらべ)古墳」「京楽(きょうらく)古墳」とも呼ばれている。銀を運ぶ一行も、この古墳のそばを通って行った。

1日目宿泊地
大森から約29km

銀の道探訪マップ③



飯南町北野

美郷町九日市、三次市布野町編

第一夜を九日市で過ごした銀輪送隊は、早朝に立上り酒谷の口留番所を越え、赤名の宿に向かう。赤名の宿は出雲と備後の接点として栄え、今でも宿場町らしい景観を残している。

赤名で馬替えをした一行は、なだらかな道をしばらく進んだ後、いよいよ赤名峠にさしかかることになる。当時の道筋は赤名トンネルの手前から山に入る山道がルートとなっていた。赤名峠へは明治になってきた旧国道を地元の人々が草刈りし、乗用車で行けるよう努めている。

- この区間の主な見どころ
- ・西の原古道
 - ・九日市本陣跡
 - ・ふるさとおもち伝承館
 - ・橋台岩
 - ・シャクナゲ
 - ・酒谷の名水
 - ・名石
 - ・酒谷番所跡
 - ・江戸時代の農家
 - ・赤名湿地
 - ・長者原古墳
 - ・赤名の道標
 - ・毛利と尼子の古戦場
 - ・赤穴八幡宮（丹塗箭神話）
 - ・瀬戸の一里塚跡
 - ・北野の馬頭観音
 - ・赤名峠
 - ・万右衛門の墓
 - ・熊地藏



峠の文化

広辞苑には、峠はもともと「たむけ」という言葉が転じたもの、と記述されている。峠を往来する人が旅の無事を祈って、道端の道祖神に柴などをたむける、このような姿から峠という言葉が生まれた。

峠は村境になっていて、村境が多、「サイの神」がまつられることもある。この神様は他国から疫病や悪霊が進入するのを防ぐ、あるいは旅の行路の安全を祈願する旅人を守ると信じられていた。



上赤名の銀山街道から赤名峠を望む



赤名峠の案内看板

中世以降になってくると、お地藏さんが峠に置かれるようになる。お地藏さんは子どもの守り神として良く知られている。やがてこれが、「子宝の神」さらには「豊作の神」として、発展解釈されていくようになり男女像や陰陽石なども置かれるようになっていく。このように、峠にはさまざまな信仰文化が見られる。

赤名湿地

赤名地区福田に湿地性植物の群落が見られる。島根県下では最大規模といわれるハンノキ林が広がり、その下にミツガシワ、リュウキンカ、サギソウ、トキソウ、ハンカイソウ、ヒツジグサなどおなじみの湿地性植物が群生している。

湿地帯には歩道が整備されており、季節折々の花を楽しむことが出来る。

尚、この湿地帯は福田地域の人々のボランティア活動によって管理されている。訪れる人は、環境保護に配慮することを心がけて欲しい。



ミツガシワ
(リンドウ科)
高地の湿原に多い多年生水草。



赤名湿地

丹塗箭（にぬりや）神話

赤名地内にも、出雲神話に關係する伝説がいくつか残されている。「丹塗箭神話」もその内の一つである。

出雲と備後の国境にそびえる女神山（めんがめやま）に玉依姫（たまよりひめ）という美しい姫が住んでいた。

ある日一本の美しい丹塗りの矢が飛んできて、姫がそれを拾いあげた。この矢こそ大山咋（おおやまくい）という神様の化身で、そのみたまが通じて姫が身ごもり、赤穴山で別雷神（わけいかづちのかみ）を産んだ。



赤穴八幡宮の境内にあるモニュメント

というあらすじで、赤穴八幡宮には、モニュメントが建立されている。

その他にも出雲神話に登場する地名が、赤名周辺にたくさん残っている。

赤名の半夏市（はんげいち）

「半夏」とは夏至から十一日目に当たる日で、半夏（カラスピシャク）という名の薬草がこの時期さかんに生えることから、そう呼ばれるようになった。この日は畑などに入らないようにという、農耕を慎む風習もあり、農家では数日間休んだり、餅をついたり、寿司や麦こがし、まんじゅうなどを作ったりして、骨休めをしたという。

赤名ではこの日に大きな牛市が開かれ、近在の村々から多くの人々が集まりにぎわっていた。現在もその伝統が引き継がれ、半夏市が毎年七月始め頃開催されている。



赤名の半夏市

主な連絡先

- 飯南町役場赤名庁舎 0854-76-2221
- 飯南町教育委員会 0854-72-1354
- 島根県中山間地域研究センター 0854-76-2025
- 道の駅赤来高原 0854-76-2007

銀の道関連ホームページ

- 江の川文化圏会議 銀の道探訪
<http://www.chusankan.jp/gonokawa/roman/HISTORY/>
- 元祖・銀山街道の草刈り&発掘
<http://bio-region.com/akatonbo/ginzan.html>

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平18 中復 第150号)



 <p>①西の原古道 沢谷川沿いには、岸辺の路肩崩壊を防ぐために植えられた、カシヤツバキが、今も銀の道と共に残っている。</p>	 <p>②九日市の本陣跡 早朝大森を出発した輸送隊は、日暮れ時に九日市に着く。第一夜を迎える宿場には、本陣「原田屋」と脇本陣「鍛冶屋」があった。</p>	 <p>③橋台として使われた岩 かつてここに土橋があった。その橋の橋台として利用されていたという岩が、新しい橋の下に残されている。</p>	 <p>④酒谷の口番所跡 出雲との国境となるこの番所には、他の番所ではあまり例のない、門が道をまたぐようにして建てられていたという。</p>
 <p>⑤下赤名の古道 街道は下赤名から出雲の国に入る。当時の道が残っており、古道脇には江戸時代のものと思われる農家がそのまま残っている。</p>	 <p>⑥長者原古墳 「駒競(こまくらべ)古墳」「京楽(きょうらく)古墳」とも呼ばれている。銀を運ぶ一行も、この古墳のそばを通過していった。</p>	 <p>⑦赤名の道標 銀の道は赤名で出雲街道と合流する。街道脇には、1856年に建てられた道標が残っている。</p>	 <p>⑧瀬戸の一里松跡 広島と松江の中間点にあたる瀬戸には一里松があった。松くい虫被害のため切り倒され、今は民家の裏にその切り株が残っている。</p>
 <p>⑨北野の馬頭観音 街道は、いよいよ赤名峠にさしかかる。その坂の口に、旅人の行路安全を祈る馬頭観音が残されている。</p>	 <p>⑩赤名峠 出雲と備後の国境で、昔から難所として知られていた。当時の街道は、赤名トンネル手前から急な坂を上るように進んでいた。</p>	 <p>⑪万右衛門の墓 肴売り万右衛門が磯五郎に殺され金を奪われた事件は、現場が藩境で天領にもからみ、説明が難しかったという記録が残っている。</p>	 <p>⑫熊地蔵 言い伝えでは、熊を飼育していた人が建立したという。地蔵の場所は、一里松があった所で、辺りには古道が昔のまま残っている。</p>



凡例

	銀の道(車)※1		車輛迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。

銀の道探訪マップ④



三次市布野町

三次市布野町く 山家(やまが)町編

赤名峠を下ると三次市布野町横谷に入る。銀の道はここから再び山越えの道を行き、仏ヶ峠(ほとけがたお)を越える。この峠を下りるとようやく布野の宿に着く。布野は陰陽交易の中心地として栄え、町には、現在の国道五四号、明治の道、江戸時代の道の三本の道が通っている。そのうち銀の道は、一番山寄りの狭い道を行く。布野の宿を過ぎると、街道は山際のコースをたどりながら、神野瀬川を渡り、三次市山家町のなだらかな風景の中をいく。

- この区間の主な見どころ
- ・赤名峠
 - ・熊地蔵
 - ・国境碑
 - ・広島鉾山作業所跡
 - ・たたら文化の名残(捨金)
 - ・布野の宿
 - ・鏡ヶ宿古墳
 - ・福泉坊のオオイチヨウ
 - ・中村憲吉句碑
 - ・下布野の道標
 - ・神野瀬川の渡し
 - ・山家一里塚跡
 - ・万右衛門の墓
 - ・殿敷
 - ・仏ヶ峠
 - ・中村憲吉生家
 - ・松雲寺の五輪塔
 - ・千人塚
 - ・知波夜比売神社



万右衛門の事件

赤名峠を超えて、広島県三次市布野町に入った民家の裏手に、「万右衛門」という名を刻んだ小さな墓が建っている。

万右衛門は、大森銀山領の住人で海産物などを売り歩く商人だったが、この赤名峠を超える途中、博打で無一文になった磯五郎に殺されてしまった。犯人は広瀬藩の人間、被害者は大森領の人間、そして事件現場は広島藩ということ、それぞれの藩や代官所の役人が、事件の取り扱いをめぐって、お互い気を遣ったり、思惑があったり、右往左往する様子が克明に記録されている。当時の街道の様子を知る上で興味深い。



万右衛門の墓

鏡ヶ宿古墳

布野の町から山側へ三〇〇メートルほど入った所に、不思議な古墳が残っている。一帯は鏡ヶ宿という地名で、かつては四、五基の古墳があったらしいが、現在は二基のみが確認できる。行ってみると、大きな石を組んだ横穴式石室が露出しているのがわかる。出土した須恵器の形から推測すると、この古墳は、七世紀前半頃のものと思われる。見どころは、積み上げられた二メートル上の巨大な平石が圧巻で、別名石舞台と呼ばれている。



鏡ヶ宿古墳

中村憲吉



中村憲吉 (1889~1934)

おくれたる梅雨ぞいたりて田植えすみ
山がはの里しずかになりぬ

中村憲吉は有名なアララギ派の歌人で、布野で生まれた。

生家は布野町の中心街にあり、父が金融業のかたわら田畑の集積を行い、田畑五〇ヘクタール、山林五〇ヘクタールの大地主であったことから裕福な家庭で育っている。地元の小学校を卒業し、三次中学校(現在の三次高校)を出て、東京大学に入学した。布野に帰郷してからも作歌活動を続け、特にふるさとの自然や人々の暮らしを題材にしたあたたかい作品を作ってきた。



中村憲吉の生家

〔生家見学は事前に予約が必要、電話〇八二四(五四)一〇八八〕

捨金とたたら文化

たたら製鉄業は、人の経験や勤にたよるところが大で、神の加護を祈りながら作業が行われた。たたら神様として金屋子神が有名だが、この神様は桂の木を伝って降臨するとされ、金屋子神社と桂の木は、たたら関係者に大切にされてきた。

また炉の中に残った最後の溶鉄は、人のために使わないで神に捧げるものとして流し捨てることも行われていた。この鉄のことを捨金といい、布野町生涯学習センターの庭の一角にこれが残っている。



捨金

主な連絡先

- 三次市役所布野支所 0824-54-2113
- 布野生涯学習センター 0824-54-2119
- 道の駅ゆめランド布野 0824-54-2929
- 中村憲吉生家 0824-54-1088

銀の道関連ホームページ

- 江の川文化圏会議 銀の道探訪
<http://www.chusankan.jp/gonokawa/roman/HISTORY/>
- 道紀行温泉津から尾道笠岡 布野村 中国新聞
<http://www.chugoku-np.co.jp/tokusyuu/mitikikou/m020728.html>

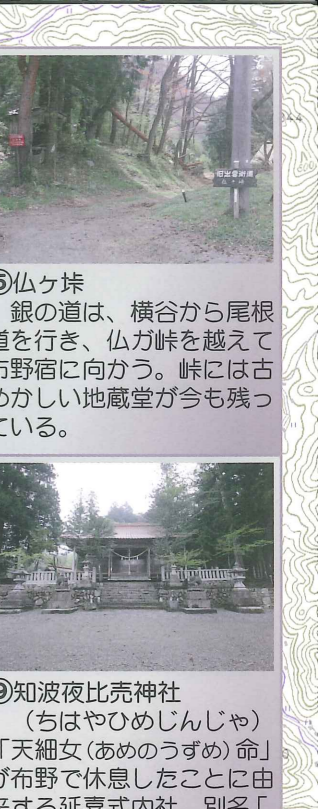
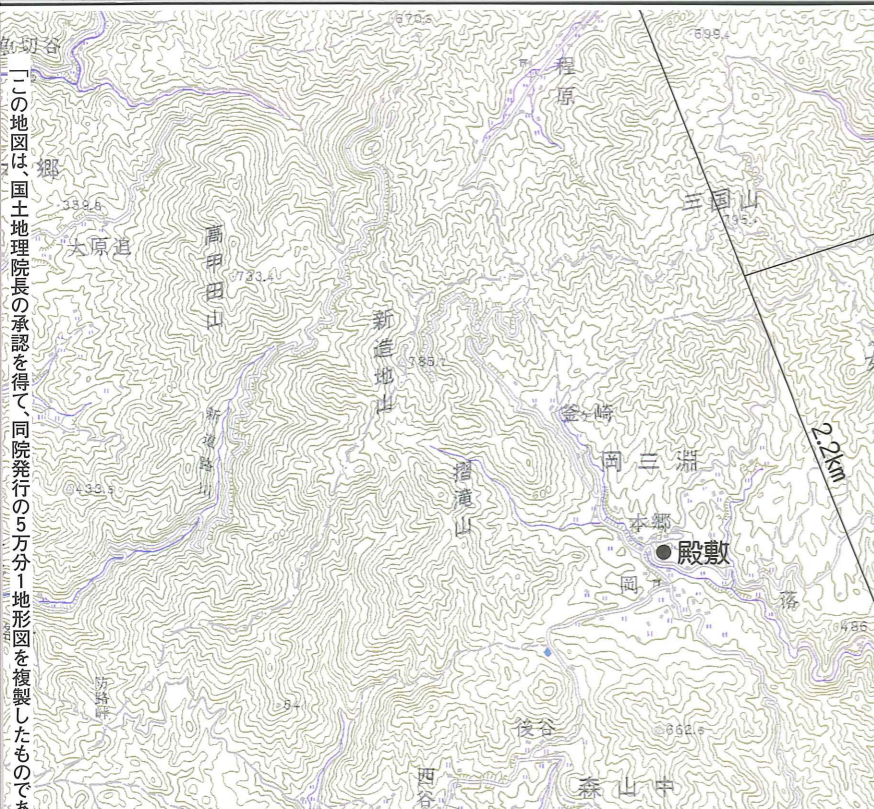
荷車の歌

昭和三四年に映画化された有名になった「荷車の歌」は、赤名峠に向かう横谷村を舞台としている。主人公の「セキさん」は明治三〇年代、実際に荷車を引いて、三次まで物資を運ぶ仕事に携わった女性をモデルとし、作者である山代巴が書き上げたものである。当時の過酷な労働環境の中で、懸命に生きる女性の一途さ、たくましさで紹介され、全国の農村女性に多くの感動を与えた。

銀の道周辺には、その女性が住んでいたという場所や、奉公先である「殿敷」という古民家も残っている。



殿敷



①赤名峠
出雲と備後の国境で、昔から難所として知られていた。当時の街道は、赤名トンネル手前から急な坂を上るように進んでいた。



②万右衛門の墓
肴売り万右衛門が磯五郎に殺され金を奪われた事件は、現場が藩境で天領にもからみ、解明が難しかったという記録が残っている。



③熊地蔵
言い伝えでは、熊を飼育していた人が建立したという。地蔵の場所は、一里松があった所で、辺りには古道が昔のまま残っている。



④国境碑
江戸時代、赤名峠に建てられていたもの。一度取り替えられたこともあり、今は2本とも瀬戸八幡宮境内に置かれている。



⑤仏ヶ峠
銀の道は、横谷から尾根道を行き、仏ヶ峠を越えて布野宿に向かう。峠には古めかしい地蔵堂が今も残っている。



⑥布野の宿
瀬戸内と山陰を結ぶ広島藩最北の宿駅で、陰陽交易の要衝として早くから町が形成されていた。当時の道筋が市街地に残っている。



⑦福泉坊の大銀杏
福泉坊は布野を治めていた仁井家の菩提寺で、境内のイチョウは胸高周6.5mあり、1770年前後の植栽と伝えられている。



⑧松雲寺の五輪塔
松雲寺には、1322年建立の五輪塔がある。銘のある五輪塔では広島県最古のもので、県重要文化財に指定されている。



⑨知波夜比売神社
(ちはやひめじんじゃ)「天細女(あめのうずめ)命」が布野で休息したことに由来する延喜式内社。別名「振社(ふりしゃ)」とも言う。



⑩下布野の道標
かつて下布野一帯は湿地帯であり、沼地をさけるため街道はこゝらあたりから山に入り、三次の山家地区へと向かう。



⑪神野瀬川の渡し
渡しをこえた三次の山家に、神野瀬原という所があり、川が増水して渡れない山に入り、三次の山家地区へと向かう。



⑫山家一里塚跡
広島藩が、1633年から藩内の街道を整備した。この時設置された一里塚跡があり、大きな松の切り株が残っている。



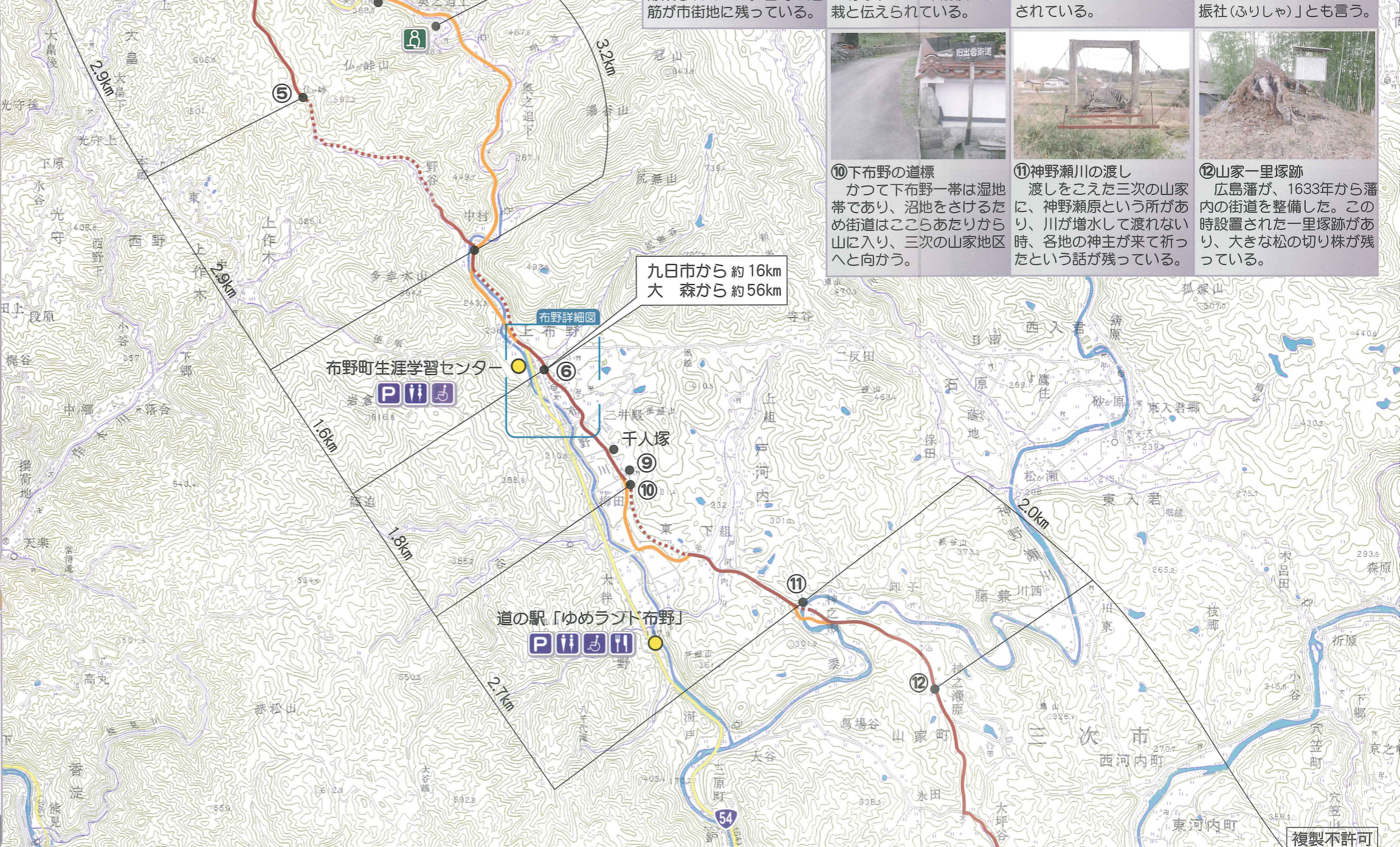
凡例

銀の道 (車) ※1	車輦迂回路
銀の道 (歩) ※2	おもな施設
道標・石碑	駐車場・駐車可能場所
常夜灯	トイレ
地蔵・石仏	トイレ (車イス可)
辻堂・祠	レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道 (道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む (家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様 注意して運転して下さい。

2006.4



複製不許可

銀の道探訪マップ⑤

三次市山家(やまが)町く 三次市三良坂町編

三次市山家町から下ってくと、銀の道は江の川水系西城川と出会う。ここから三次市街まで、切り立った崖の道を進む。宮の峡(みやのかい)と呼ばれる難所だ。すっきり日が暮れて着いた一行は、三次で二泊目の宿をとる。ここは山陰と山陽の交易の拠点として古くからひらけ、町並みにその趣を残している。

三次から吉舎までの間はほとんど平坦な道が続くが、川を渡らなければならぬ所がいくつあつて、決して楽な旅ではなかった。

- この区間の主な見どころ
- ・神野瀬川の渡し
 - ・山家一里塚跡・宮の峡
 - ・稲生武大夫の碑
 - ・三次の道標
 - ・運甕居
 - ・三次社
 - ・浅野堤
 - ・鳳源寺
 - ・歴史民俗資料館
 - ・みよし本通り人形館
 - ・照林坊
 - ・住吉神社
 - ・陣山墳墓群
 - ・寺町廃寺跡
 - ・岡田の渡し
 - ・六地藏
 - ・知波夜比古神社
 - ・一字一石塔
 - ・奥家住宅



三次市三次町

三次の土人形

この地方では男子が生まれると武者人形、女子が生まれると娘人形、あるいは性別に関係なく天神人形を贈るという習慣がある。

三次人形の歴史は古く、文献では一八五四年に大森領祖式村の瓦師が浜田の長浜人形の技術を習得し、良い粘土を求めて三次までやって来て、宮の峡という所で土人形作りを始めたといわれている。言い伝えではもともと古く、一六一四年に三次藩主浅野公が江戸から人形師を伴って帰ったという説もある。三次人形は、みよし本通りの人形館で見学することができる。



三次人形

赤穂浪士にまつわる話



義士堂の木像

三次市と赤穂浪士の関係は深い。四十七士の一人、菅谷半之丞は赤穂藩取りつぶしの後、親戚を頼って三次に入っている。

文献によると半之丞は三次の寺戸にある甲斐谷に小さな庵を構え住まわして暮らしていた。釣りなど遊びと酒の日々を過ごしていたが、ある日、有馬の湯に出かけると言い残し姿をくらました。やがて討ち入りのニュースが三次にも伝えられ、四十七士の中に彼の名が入っていることを知った町中の人々が驚き、その忠義心を讃えたという。

鳳源寺の義士堂には四十七士の木像が安置され、菅谷半之丞もその一隅に立っている。

三次の鵜飼

鵜飼いは、中国の長江流域や日本で見られない、大変珍しい漁法だ。日本では、かつて全国一五〇ヶ所くらいで行われていたが、現在では、主に西日本の十数ヶ所で見られる。

三次の鵜飼いは、戦国時代に、毛利元就に敗れた尼子の武士達が始めたのが元になったと言われている。その技術は脈々と受け継がれ、アユを取ることも当然だが、それ以外に「見せる」という技術についても様々な工夫が加えられた。舟が円を描くように中心へ向かって移動する「ツルノスゴモリ」、あるいは、数艘の舟が一斉に川を横切るように進む「ソウガラミ」など、大変見応えのある漁法がその例だ。

三次の観光鵜飼いは、姉妹交流をしている中国の四川省から贈られた白い鵜が、黒い鵜と並んで泳ぐ姿が見られる。



三次の観光鵜飼

浅野堤は一八二〇年に書かれた「三次町国郡誌」によると、堤防の長さは町の東側が五二〇メートル、西側が八八〇メートルで、三次藩主浅野長治の時代に築かれたものという。

浅野長治は一六三二年に広島藩から分家された三次藩の初代藩主として着任した。その時一九歳という若さであったが、三次の城下町づくりに力を注いだ。本来、城は堅固な山の上に築くのが普通であったが、三次の町が川に囲まれているため、長治はこれを城の堀と見立て、三次町全体を城郭と考えた。そして武家も町人もまとめて、城内に住まわす、総郭型(そうくわがた)という、当時としては革新的な考え方で町づくりを行った。



発掘直後の浅野堤 (現在は一部しか見ることができない)

浅野堤

四隅突出型墳丘墓

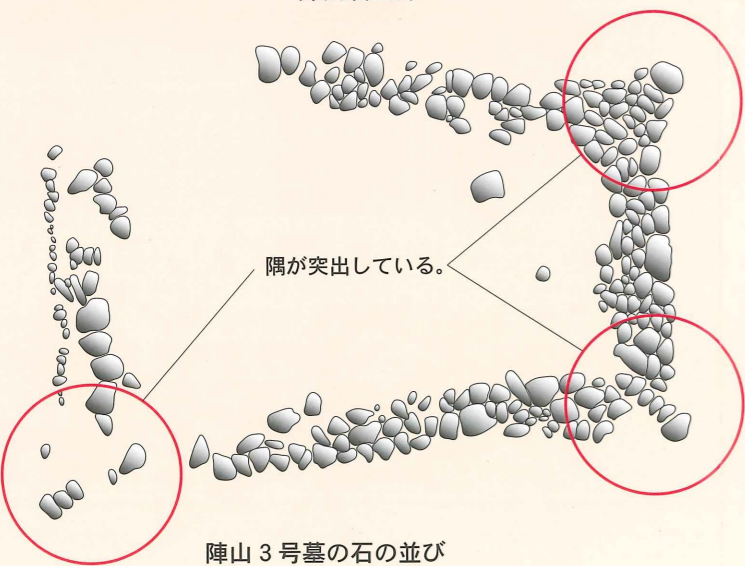
三次には四つ角を突出させて糸巻きのような形にした、四隅突出型墳丘墓が多く見られる。

その分布域は江の川流域、出雲地方、そして北陸まで広がっているが、年代的には出雲や北陸のものは比較的新しいものが多い。近年発見された三次の陣山墳墓群は一世紀から二世紀初めのものとされ、一般的に三次地方の四隅突出型墳丘墓は古いものが多い。

このことから、三次市を中心として、四隅突出型という変わった墓を造る、独自の文化を持っていたナゾの集団が江の川流域には存在していたと考えることができる。そしてこの様式は発展しながら出雲に伝わり、遠く北陸まで伝わったものという可能性も考えられる。



陣山墳墓群



陣山3号墓の石の並び

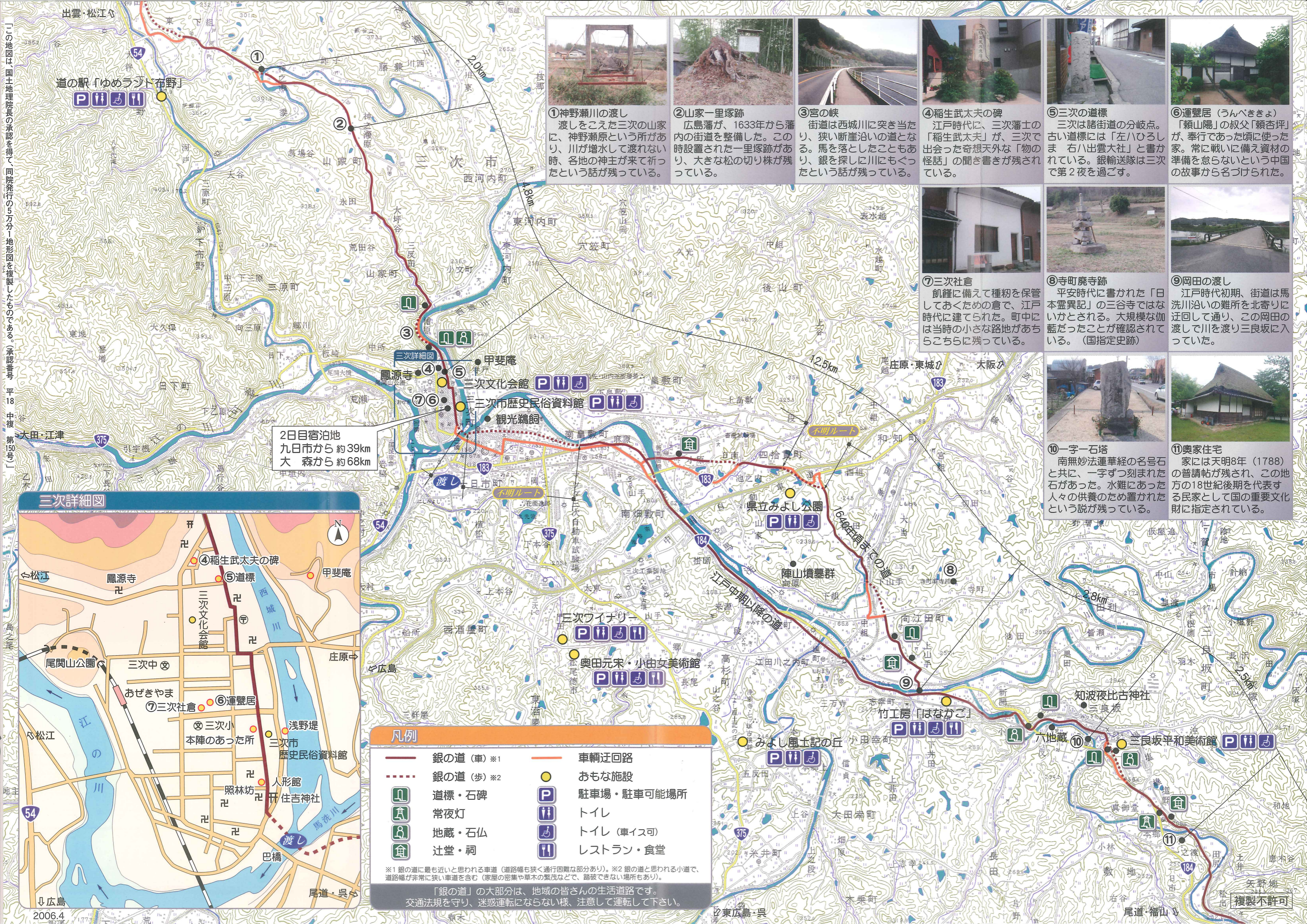
主な連絡先

- 三次市役所 0824-62-6111
- 三次市立歴史民俗資料館 0824-64-3517
- 三次市観光協会 0824-63-9268
- 県立みよし風土記の丘 0824-66-2881

銀の道関連ホームページ

- 江の川文化圏会議 銀の道探訪
<http://www.chusankan.jp/gonokawa/roman/HISTORY/>
- 夢街道ルネッサンス
<http://www.cgr.mlit.go.jp/cgkansen/yumekaidov/>

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平18中復第150号)



①神野瀬川の渡し
渡しをこえた三次の山家に、神野瀬原という所があり、川が増水して渡れない時、各地の神主が来て祈ったという話が残っている。



②山家一里塚跡
広島藩が、1633年から藩内の街道を整備した。この時設置された一里塚跡があり、大きな松の切り株が残っている。



③宮の峡
街道は西城川に突き当たり、狭い断崖沿いの道となり、馬を落としたこともあり、銀を探しに川にもぐったという話が残っている。



④稲生武太夫の碑
江戸時代に、三次藩士の「稲生武太夫」が、三次で出会った奇想天外な「物の怪話」の聞き書きが残されている。



⑤三次の道標
三次は諸街道の分岐点。古い道標には「左八ひろし 右八出雲大社」と書かれている。銀輸送隊は三次で第2夜を過ごす。



⑥運甕居 (うんべききよ)
「頼山陽」の叔父「頼杏坪」が、奉行であった頃に使った家。常に戦いに備え資材の準備を怠らないという中国の故事から名づけられた。



⑦三次社倉
飢饉に備えて種粉を保管しておくための倉で、江戸時代に建てられた。町中には当時の小さな路地がこちらに残っている。



⑧寺町廃寺跡
平安時代に書かれた「日本霊異記」の三谷寺ではないかとされる。大規模な伽藍だったことが確認されている。(国指定史跡)



⑨岡田の渡し
江戸時代初期、街道は馬洗川沿いの難所を北寄りに迂回して通り、この岡田の渡しで川を渡り三良坂に入っていた。



⑩一字一石塔
南無妙法蓮華經の名号石と共に、一字ずつ刻まれた石があった。水難にあつた人々の供養のため置かれたという説が残っている。



⑪奥家住宅
家には天明8年(1788)の普請帖が残され、この地方の18世紀後期を代表する民家として国の重要文化財に指定されている。

2日目宿泊地
九日市から約39km
大森から約68km



凡例			
	銀の道(車)※1		車輛迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、路破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。

銀の道探訪マップ⑥

三次市三良坂町〜甲奴町編



三次市吉舎町

三次市向江田町で、岡田の渡しを越えた輸送隊一行は、三良坂の町を過ぎ、吉舎に入っていく。吉舎は、世羅台地と三次盆地の接点として宿場町が形成され、輸送隊の馬替えと昼食休憩の場所となっていた。宿泊地として使われることも、しばしばあったという記録も残っている。吉舎から山越えの道となり、鍋割峠を越えると、甲奴町宇賀の里が見えてくる。宇賀は、「銀の道」笠岡ルートと尾道ルートの街道分岐点でもある。

- この区間の主な見どころ
- ・寺町摩寺跡
 - ・岡田の渡し
 - ・知波夜比古神社
 - ・奥家住宅
 - ・下素屋の一里塚跡
 - ・田中写真館
 - ・吉舎歴史民俗資料館
 - ・歴史の町並み
 - ・中山の一里塚跡
 - ・尾道・笠岡ルート分岐点
 - ・須佐神社
 - ・陣山墳墓群
 - ・六地藏
 - ・一字一石塔
 - ・古銀山
 - ・良神社
 - ・宇賀の辻堂
 - ・下野の道標



後鳥羽上皇伝説

後鳥羽上皇は、一二二一年に時の権力者北条義時を討つようとして失敗し、隠岐に流された。その時どのようなルートを通って配流されたか、いろいろの説がある。

吉舎にもその伝説があつて、後鳥羽上皇がここで一夜を明かした時に、「吉(よ)き舎(やど)りかな」と、言ったことが地名となったと伝えられている。町内の「良(うしろ)ら神社」には、後鳥羽上皇のご真筆の勅額があつたとも伝える。通説では、「后妃のために置いた私的な部署」のことを「私部(きさいべ)」と言い、これが地名のもととなったとされている。



良神社

庚申塚(こうしんづか)とは何か

「良(うしろ)ら神社」の境内に、「庚申塔」と記された石塔が残されている。平安時代、貴族の間で盛んに行われていた「庚申信仰」という宗教形態があつた。当時は「二ヶ月に一度巡ってくる庚申(かのえさる)の日に、人間の体に潜んでいるサンシという虫が、寝ている間に体を抜け出して、天帝の所まで行って行き、その人の悪行を告げ口しに行く」と信じられていた。そのためこの日には、サンシの虫が体から抜け出さないよう、身を清めて夜を明かすという風習があつた。この考え方は、やがて貴族社会から一般に広がり、庚申の行事が民衆の間でも行われるようになってきた。庚申塚や庚申塔は、その日に人々が夜を明かすため、みんなで集まる場所として建てられたものだ。



庚申塔



六地藏

六地藏の話

地藏はもともと、古代インド農耕民族の大地信仰をもとに、万物を育む母なる神として崇められていたものだ。これが仏教に取り入れられ、死後の世界にも救済の手を差しのべてくれる菩薩として信仰を集めるようになった。人間はこの世の報いとして死後、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道の世界に生まれ変わるとされ、それぞれ六つの世界を担当する地藏菩薩が六地藏である。街道を歩いていると、村境や峠に置かれた六地藏には、危険な旅の道中を守ってほしいという人々の願いも込められている。



この付近に昼食場所(御茶屋)があつた

代官所役人の昼食

銀輸送隊の責任者には、大森代官所の手代クラスの武士二〜三名が任命されていた。一八一九年の「吉舎国郡志」に、その役人の昼食の献立表が載っている。

- それによると、
- | | | | |
|----|------|------|------|
| 刺身 | 鯛 | いりさけ | しょうが |
| 汁 | 川はえ | 大根 | ごぼう |
| 坪 | かまぼこ | 根ぶか | にんじん |
| 平 | よし茸 | 里いも | |
| 台引 | 山のいも | せり | 鴨 |
| 重引 | 海老 | くねんぼ | |
| 吸物 | 水菜 | くり | |
| 猪口 | 蒸蛤 | 砂鉢 | 酢蛸 |
| | 鮎の子 | うるか | しょうが |

これにお酒、ご飯、香物、お菓子、お茶などがついて大変豪華なものだった。

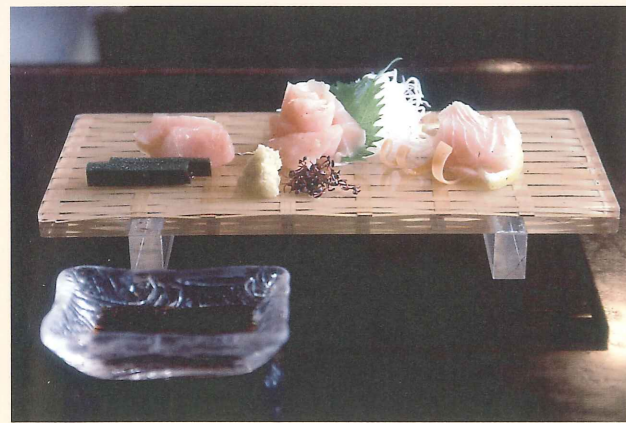
ワニ食文化

ワニは鮫の古語で、鮫やエイの類は、アンモニア成分を体の中に蓄積させる性質があつて、捕ってから二〜三日たっても腐りにくい。昔は、交通事情が悪かった奥地でも、刺身として食べられる唯一の魚だった。



ワニ食文化を示す看板

この地方では、一〇月初めくらいから、村々で秋祭りが続く。秋祭りのご馳走に欠かせないのが「ワニの刺身」で、祭りの招待客には、腹が冷えるほどワニを食べてもらわないと、充分もてなしをしたことにならないという。正月にも、ワニは欠かせない。かつては、年末の大売り出しの時、シユモクザメがまるまる一頭、店先の雪の上になげ出されているという光景もあつた。このように、祭りや正月をはじめ、年間を通じてこの地域の人々は、約二〇種類のサメを食べているという。料理法は、刺身の他に、湯ぶきや煮こり、最近ではハンバーグにして食べる事例もある。



ワニの刺身

主な連絡先

- | | |
|--------------------------|--------------|
| 三次市三良坂支所 | 0824-44-3111 |
| 三次市吉舎支所 | 0824-43-3111 |
| 吉舎歴史民俗資料館
美術館あーとあい・きさ | 0824-43-2231 |
| ロードサイドミュージアムXa104 | 0824-43-3122 |

銀の道関連ホームページ

- みち紀行 温泉津から尾道笠岡へ 三良坂町
<http://www.chugoku-np.co.jp/tokusyuu/mitikikou/m020811.html>





①寺町廃寺跡
平安時代に書かれた「日本霊異記」の三谷寺ではないかとされる。大規模な伽藍だったことが確認されている。(国指定史跡)



②岡田の渡し
江戸時代初期、街道は馬洗川沿いの難所を北寄りに迂回して通り、この岡田の渡しで川を渡り三良坂に入っていた。



③一字一石塔
南無妙法蓮華經の名号石と共に、一字ずつ刻まれた石があった。水難にあった人々の供養のため置かれたという説が残っている。



④奥家住宅
家には天明8年(1788)の普請帖が残され、この地方の18世紀後期を代表する民家として国の重要文化財に指定されている。



⑤古銀山
広島藩が度々再開を試みたが再開されなかった。吉舎は木炭の主要な生産地で、ここの木炭も大森に送られ銀精練に利用された。



⑥下素麺屋の一里塚跡
1633年頃幕府は主な街道約4km毎に、塚を作り松を植えさせた。一里松は平成4年松食い虫のため枯れ、今は切り株が残っている。



⑦歴史的街並み
吉舎は街道の宿場として栄えたが、その面影を残す街並みが吉舎町市街の各所に残っている。



⑧中山一里塚跡
吉舎と甲奴の境界となる峠の頂付近に一里塚の跡が残っていたが、現在は藪に覆われ見えにくくなっている。



⑨宇賀の辻堂
地元では、郷地蔵(ごうじぞう)さんと呼ばれている。銀の道はこの先で「笠岡ルート」と「尾道ルート」に別れる。



⑩須佐神社
1517年の創建で県重要文化財。ここの大社奥は台車付き高さ3.4m幅2.1m重さ1.5tで、「おごっさん」と呼ばれている。



⑪下野の道標
総領町に向かう道との交差点に残っていたと思われる道標。近年の道路改良で新しく作り直され、商店の門先に置かれている。



凡例

	銀の道(車)※1		車輛迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。
交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。

銀の道探訪マップ⑦



三次市甲奴町

三次市甲奴町く 世羅町甲山編

三次市甲奴町宇賀の分岐点を尾道に向かつて南下すると、広石を越え頼藤（よりとう）に出、さらに進むと世羅町との境となる柴峠を越える。世羅のなだらかな道を列迫、赤屋と通過し、いよいよ三夜目の宿泊地である甲山の町に着く。甲山は高野山の荘園として中世から栄え、そのシンボル「今高野山」に大伽藍が残されている。御銀蔵はその参道口付近にあったとされる。翌日、甲山を出立した輸送隊は、次の宿場町「宇津戸」を経て、御調町宇根を越える。

この区間の主な見どころ

- ・中山の一里塚跡 ・宇賀の辻堂
- ・尾道・笠岡ルートの分岐点
- ・須佐神社
- ・頼藤の道標
- ・八王子神社
- ・矢野の岩海
- ・砂田の木得堂と古道
- ・毘沙門堂の石造層塔群
- ・日本回国塔
- ・報恩寺と古道
- ・赤屋八幡宮
- ・良八幡宮
- ・今高野山
- ・今市の古道
- ・世良彦八幡宮



小童（ひち）の須佐神社

「小童」という地名を読める人は少ない。一説では、子どもがだだをこねて泣き転げることを「ひちぐるう」と言うが、それが地名の元になったという話もある。

小童の「須佐神社」は、ぎおんさんと呼ばれ「素戔鳴尊」を祀る古い神社で、秋祭りには、広島県の重要無形民俗文化財に指定されている芸能「矢野神儀」が行われる。

また、ここには約五〇〇年前に造られた、高さ三・四メートル、幅二・一メートル、重さ一・五トンの大神輿があり、この引き綱を引くと厄払いになり願い事が叶うとされ、地元では「おごっさん」と称して親しまれている。



須佐神社

報恩寺の子育て観音

赤屋の「報恩寺」は、一三〇一年の高野山古文書にその名が既に見え、古くから重要な寺院であったと思われる。寺宝の「十一面観音立像」と「聖観音立像」は、共に国の重要文化財となっている。

「安産・子育て・母乳の足りない女性に乳を授ける」との信仰を集め、別名「子育て観音」とも呼ばれている。子どもの無事成長を願う人が、今も多く訪ねていると思われ、境内のお堂にはその関連のお供え物が絶えることがない。



聖面観音

十一面観音

毘沙門堂の石造層塔

世羅町青近の毘沙門堂には二基の石造層塔が残っている。

これら石塔は形式から見て南北朝、室町初期の頃のものと考えられ、五重塔は高さが二・二三メートル、三重塔は二・〇六メートルあり、いずれも花崗岩でできている。

芸藩通史には「曾我兄弟の墓」と記され、広島藩主の浅野公がここを通過する際、わざわざ籠を降りて、この墓に向かつて遙拝（ようはい）したという伝承も残っている。



毘沙門堂の石造層塔

矢野の岩海（がんかい）

岩海とは、大きな岩が累々と谷を埋めるように転がっている地形を言い、俗に真砂（まさ）と呼ばれる風化花崗岩地帯で見られる。霜による浸食で周囲の山から岩が崩れ、さらに割れ目や節理に沿って化学的な風化をおこし、砂や粘土化した部分が流失して、次第に丸みをおびながら谷に集まり形成される。

矢野の岩海は、あやめ寺として有名な「安福寺」から奥に入った所であり、その規模の大きさから、国の天然記念物に指定されている。



矢野の岩海

今高野山

備後国大田荘は、平安時代末の一六六年、後白河院領として立荘された。一一八六年には紀州高野山に寄進され、その政所として「古城山」の北麓一帯に、「龍華寺」をはじめとする七堂十二院が整備されて、「今高野山（新しい高野山という意）」と呼ばれるようになった。

今高野山参道口の石見路沿いに門前町が発達し、町には中継地として市駅が置かれた。一六四四年には藩営の「御茶屋（本陣）」を設営、つづいて一六八四年には「御銀蔵」が設置され、運上銀輸送路の宿駅としても重要だった。



今高野山絵図



今高野山総門前

主な連絡先

三次市甲奴支所	0847-67-2121
世羅町役場	0847-22-1111
世羅町観光協会	0847-22-4400
大田庄歴史館	0847-22-4646
甲山いきいき村	0847-25-0090

銀の道関連ホームページ

みち紀行 温泉津から尾道笠岡へ 世羅台地
<http://www.chugoku-np.co.jp/tokusyuu/mitikikou/m020728.html>

制作 国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所

問い合わせ先: 「銀の道交流会事務局」 TEL 0855-87-0775 (Fax兼用)



①中山一里塚跡
吉舎と甲奴の境界となる峠の頂付近に一里塚の跡が残っていたが、現在、塚は藪に覆われ見えにくくなっている。

②宇賀の辻堂
地元では、郷地蔵(ごうじぞう)さんと呼ばれている。銀の道はこの先で「笠岡ルート」と「尾道ルート」に別れる。

③須佐神社
1517年の創建で県重要文化財。ここの大神輿は台車付き高さ3.4m幅2.1m重さ1.5tで、「おごっさん」と呼ばれている。

④頼藤の道標
広石から越えると頼藤に出る。街道の交差点に三角柱の道標が残されている。三角柱の形をしたものは非常に珍しい。

⑤八王子神社の常夜灯
この常夜灯には天照皇大神、巖島大明神などの刻字が見え、塔身そのものが神体を兼ねている。

⑥砂田木徳堂と古道
砂田の木徳堂に古道がそのまま残っている。この辻堂の梁などには、参拝者が記した文字が残っており興味深い。

⑦毘沙門堂の石造層塔
三層の層塔二基は、もとは五層か七層であったと思われる。南北朝～室町時代の物で、曾我兄弟の墓と言われている。

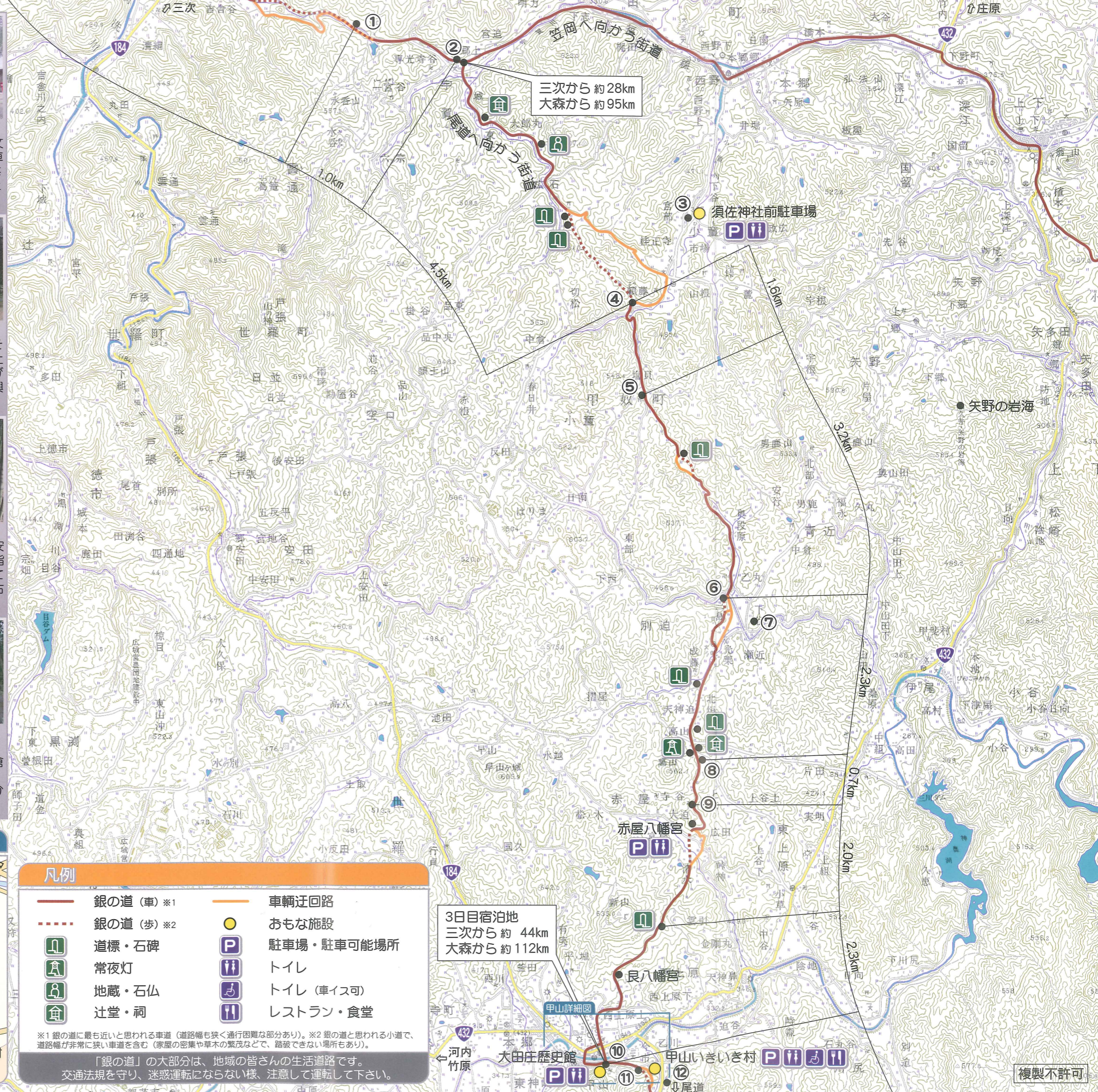
⑧もみの木の日本回国塔
回国塔は巡礼者が諸国をめぐる際、奉仕作業として建てたもの。「石みはら」の物で、曾我兄弟の墓と言われている。

⑨報恩寺の古道
赤屋「報恩寺」には平安初期と思われる、国重文指定の観音像2体が残されている。その参道口付近に古道が残っている。

⑩今高野山総門(仁王門)
「今高野山」の総門として室町時代に建立された。屋根や仁王像の囲い等は後世の補修だが、建立当初の姿を今もとどめている。

⑪今市の古道
江戸時代から変わらない古道が竹林の中に続く。傍根や仁王像の囲い等は後世の補修だが、建立当初の姿を今もとどめている。

⑫世良彦八幡宮
世羅郡の総社と言われ、銀の道に面している。鎌倉時代の文書に「世良彦社」という記述があり、古くから鎮座していた。



二の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平18 中復 第150号)

銀の道探訪マップ⑧



尾道市御調町

世羅町甲山く 尾道市御調町編

宇根を越えてきた銀輸送隊の一行は、御調町の公文に下り、御調川に沿って中心地、市へと向かう。この川には近年まで吊り橋があり、その台座の一部が残っている。江戸時代は、石や板を並べただけの簡単なものであったと想像される。

市の町並みを行くと、街道沿いに金比羅常夜灯や岩井堂の岩屋観音が見え、古道の雰囲気を感じ出している。一行は再びここから上り道を、木ノ庄町畑の峠を目指して行くことになる。

- この区間の主な見どころ
- ・ 良八幡宮
 - ・ 今高野山
 - ・ 今市の古道
 - ・ 世良彦八幡宮
 - ・ 京楽の古道
 - ・ 領家八幡
 - ・ 観音寺（丹下氏歴代總塔）
 - ・ 大名籠の休み場
 - ・ 姥石
 - ・ 宇根の古道
 - ・ 公文の辻堂と常夜灯
 - ・ 高尾の辻堂
 - ・ 圓鰐記念館
 - ・ 御調高校前の常夜灯
 - ・ 市常夜灯
 - ・ 御調川の渡し
 - ・ 市常夜灯
 - ・ 岩屋観音
 - ・ 東畑の古道
 - ・ 畑の古道
 - ・ 西畑の常夜灯

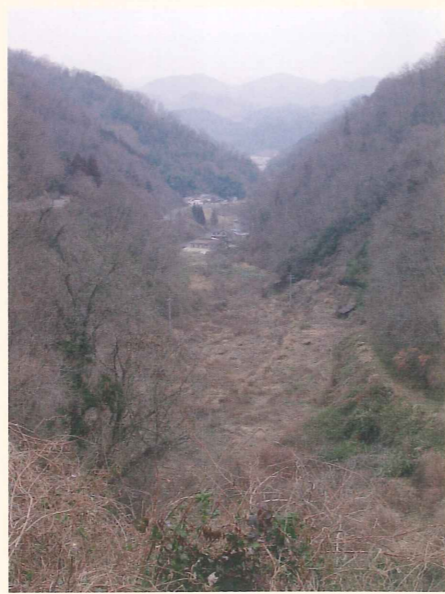
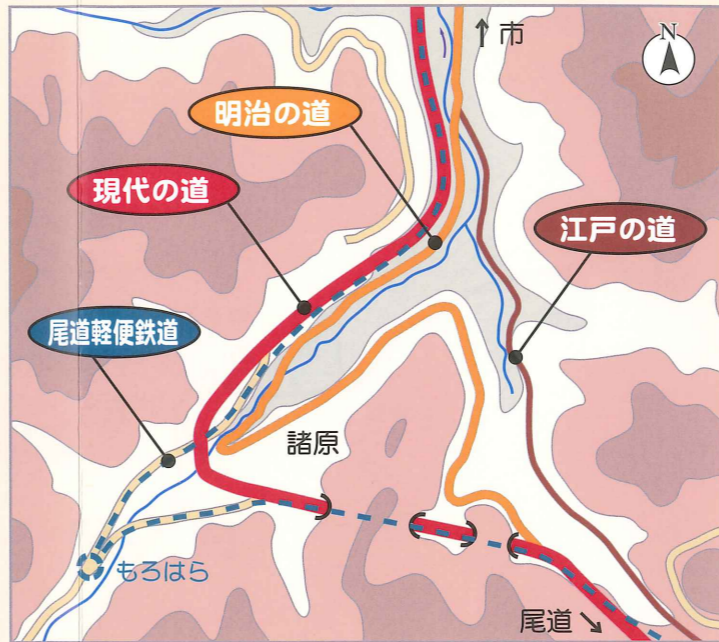


江戸時代、明治、昭和三本の道

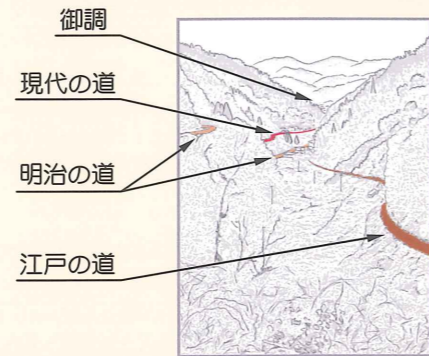
御調町市を過ぎて木ノ庄町畑の峠に向かう道は、江戸時代の街道、明治時代に開発された旧国道、昭和になってから改良された現在の国道と三本並んでいる。

江戸時代の道は、開発された当時の七尺道（二一〇センチ）がそのまま残っている。明治の道は、自動車が上れる勾配を確保するため、大きく迂回しながら上っている。廃線となった尾道軽便鉄道は、諸原駅でスイッチバックをして、峠へ向かって行った。

上から眺めると、それぞれの時代の様子が想像でき、興味深い。



諸原



丹下氏歴代總塔

宇津戸の観音寺境内には、「丹下氏歴代總塔」と刻まれた石碑が残されている。

丹下氏は、「河内丹南（かわちたんなん）」鑄物師を祖先とする一族で、中世の頃、宇津戸に來住したと伝えられている。永享四年（一四三二）から康正二年（一四五六）頃に、当時の守護職であった山名氏から、備後國鑄物師大工職（だいくしき）を安堵（あんど）され、近年まで鑄物師として活躍した。丹下氏の名前は広く知られたり、東大寺をはじめ各地の釣鐘の銘文等にその名を残している。

丹下氏に関する古文書や、当時の鑄造用鑄型などの資・史料は、大田庄歴史館に保管されている。

特殊器台土器



特殊器台土器

特殊器台土器は吉備（岡山県・広島県東部）を中心とした、弥生時代後期の中頃（二世紀頃）以降の墳墓から出土する。筒の上部に皿状の器を置き、祭祀に使用したと考えられている。

一九六八年に御調町貝ヶ原の丘陵地から出土した特殊器台は、比較的古式の様相を示すとともに、ほぼ原型のまま出土したという点で他に例がなく、学術的にも極めて貴重な資料の一つといえる。

本郷平廃寺

御調町の中心部から、御調川に沿って約四キロ上って行くと、本郷平という地区に入る。その廃寺あとから礎石群が発掘された。調査の結果、寺院の規模は相当大きいもので、奈良時代前期には、すでに七堂伽藍の大寺院が建立されていたことがわかった。当時この地域が、御調郡の中心として栄えていたことを物語っている。



礎石



圓鰐記念館

鑄物師（いもじ）丹下一族

圓鰐記念館は、御調町出身で日本彫刻界の巨匠「圓鰐勝三」氏の功績をたたえ、文化・芸術の発信基地を目指して、一九九三年に開館した。

館内には、圓鰐氏が旧御調町に寄贈した作品とコレクションが、多数展示されており、氏が彫刻家生活を始めた初期の作品から現在まで、木彫・ブロンズ・石彫・大型の石膏像などを、鑑賞できる。

圓鰐氏の作品は木彫を主流としながらも様々な素材を使い、自由な表現の多様性を生み出している。また作風は夢とロマンに溢れ、雄渾に満ちた独自の境地を拓き、たえず平和を希求する心と生きることへの愛着が現れ、少年時代を過ごした御調の地の思い出が圓鰐作品のバックボーンとなっているようだ。

圓鰐（えんつば）記念館

主な連絡先

- | | |
|--------------|--------------|
| 尾道市御調支所 | 0848-76-2111 |
| 御調町歴史民俗資料館 | 0848-76-2930 |
| 道の駅クロスロードみつぎ | 0848-76-3115 |
| 圓鰐記念館 | 0848-76-2888 |
| みつぎ遊々館 | 0848-76-3423 |

銀の道関連ホームページ

- 御調町商工会
<http://www.hint.or.jp/~mitugi/rekisi.html#rekisi>

この地図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。承認番号 平18 中複 第150号



3日目宿泊地
三次から約 44km
大森から約 112km



凡例

	銀の道 (車) ※1		車輛迂回路
	銀の道 (歩) ※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ (車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道 (道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む (家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。



13 御調川の渡し
現在は人が通れるほどの鉄橋だが、以前は吊り橋が架けられていた。江戸時代は飛び石が置かれ、これを伝って渡っていたという。



14 市の常夜灯
1847年建立の石灯籠。かつてここが街道筋であったことを物語るように、旅の安全の神様である「金毘羅大権現」と刻まれている。



15 岩井堂の岩屋観音
建立の時期や経緯は不明だが、街道に面した場所に位置しており、旅の安全や地域の守り神として信仰されていたと思われる。



16 東畑の古道
現在の国道は、大きく迂回して峠に向かっているが、谷を挟んだ東側斜面に、峠へ向かう江戸時代の古道が残っているのが見える。



17 畑 (はた) の古道
峠の頂上部に畑の集落があり、その山手に昔のままの古道がそのまま残っている。



18 西畑の常夜灯
旧街道脇に「光」の文字が刻まれた常夜灯がある。その上の民家の庭先には、もっと古い時代の常夜灯が今も残っている。

複製不許可

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平18 中復 第150号)



①東畑の古道
現在の国道は、大きく迂回して峠に向かっていて、谷を挟んだ東側斜面に、峠へ向かう江戸時代の古道が残っているの見える。

②畑(はた)の古道
峠の頂上部に畑の集落があり、その山手に昔のままの古道がそのまま残っている。



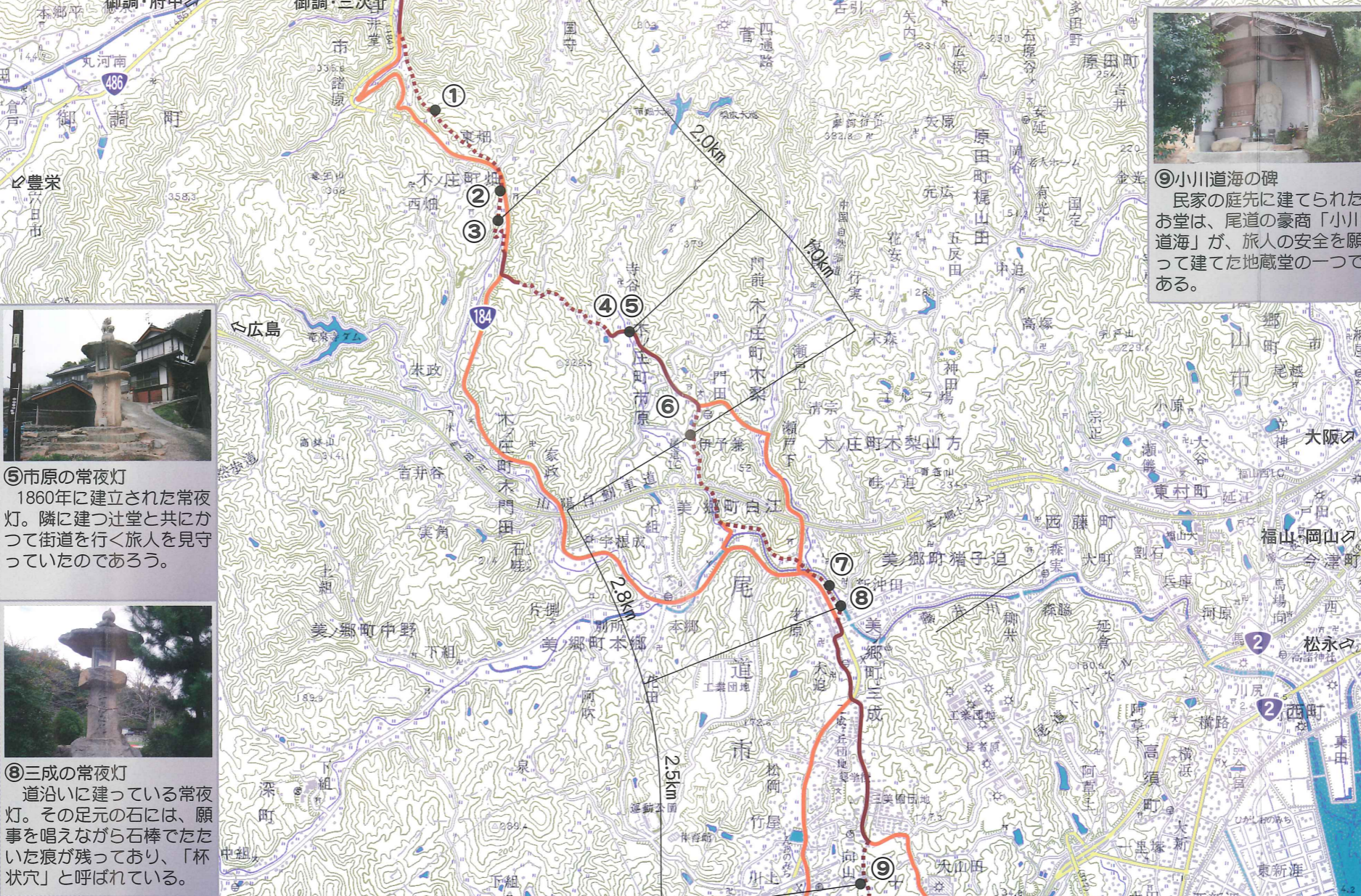
③西畑の常夜灯
旧街道脇に「光」の文字が刻まれた常夜灯がある。その上の民家の庭先には、もっと古い時代の常夜灯が今も残っている。

④市原の辻堂
市原の道沿いに辻堂が建っている。隣には常夜灯が建っており、かつては街道筋であったことを物語る。



⑥身代わり地蔵
尾道市内各所にこうした辻堂が残っており、四つ堂とも呼ばれている。この堂内には、身代わり地蔵が安置されている。

⑦三成の六地蔵
周辺の様々な古石塔、五輪塔を集め祀っている。中世には、この近くに生活の場があり、墓地もあったことが想像される。



⑨小川道海の碑
民家の庭先に建てられたお堂は、尾道の豪商「小川道海」が、旅人の安全を願って建てた地蔵堂の一つである。

⑩六本松の地蔵尊
小高い丘の上に地蔵堂が残り、このお堂の裏には六本松の名の由来となった松の枯れた株が残っている。

⑪馬小屋跡
かつて、街道沿いには乗換えようの馬が用意されており、その馬小屋と思われる跡がここにあった。現在は駐車場となっている。



⑫長江の道標
街道は県道367号から東よりの通りに入る。ここは畳問屋街となっており、一隅に出雲街道を示す道標が残っている。

⑬畳問屋
県道367号より東に一本入った通りに、畳問屋の名残をとどめている建物がある。今はここにだけが往時の面影を残している。



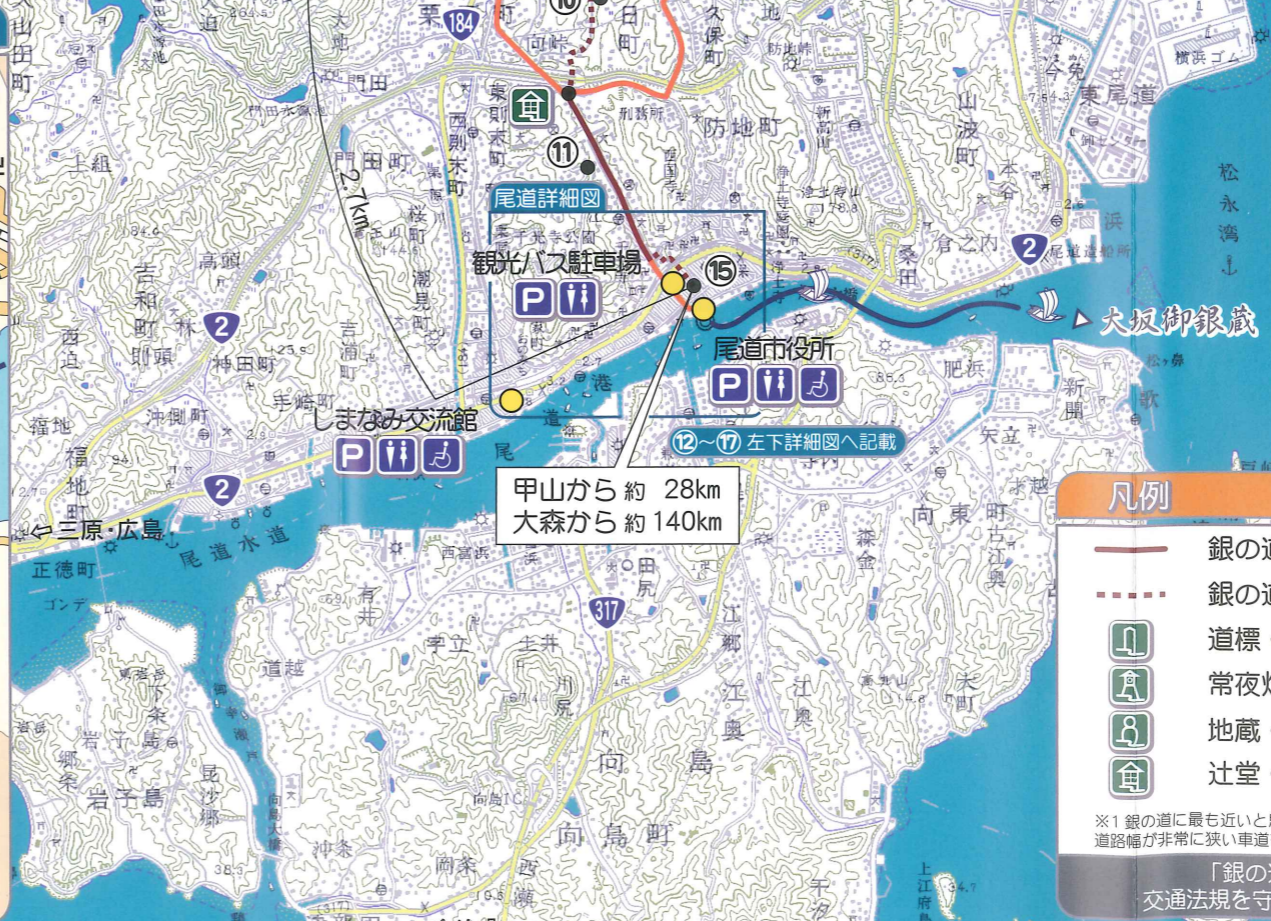
⑭丹花小路(たんがしやうじ)
銀の道はここでJR山陽本線で分断され、線路の南側では丹花小路と呼ばれる狭い道となる。小路沿いには常夜灯も残っている。

⑮尾道の本陣跡
輸送隊を率いた代官所役人が宿泊した本陣跡には、今でも立派な礎石が残っている。銀はここから船で積み出されたと思われる。



⑯出雲大社道起点の碑
街道に残された出雲大社道の起点を示す碑。尾道から出雲大社を目指す旅人の起点となる場所である。

⑰住吉神社
当時とは社の向きが違うが、今も昔も海の安全を見守っている。銀を積んだ船もここで安全を祈願したことだろう。



凡例			
	銀の道(車)※1		車輿迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。
「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。

銀の道探訪マップ⑩

三次市甲奴町く

府中市木野山町編



府中市上下町

銀の道は尾道ルートの他に、笠岡にぬけるルートもあった。このルートは三次市甲奴町宇賀の分岐点から甲奴の中心街をぬけ、上下町へ向かっている。

上下は街道の要衝地として栄え、今でも歴史的町並みを残している。
上下から井永の一里塚、水永の猫地藏を過ぎ、行藤（むかばき）を下り、木野山に入る。ここから再び山越えの道に入り、坂根峠を越えて府中市の荒谷町に向けて下っていく。

- この区間の主な見どころ
- ・中山の一里塚跡・宇賀の辻堂
 - ・下野の道標
 - ・大黒屋道標
 - ・旧角倉家の外門 横門
 - ・旧岡田家（上下歴史文化資料館）
 - ・旧警察署
 - ・旧郷宿
 - ・善昌寺の鶯張り廊下
 - ・矢野の岩海
 - ・どうどう岩
 - ・竹内の常夜灯
 - ・坂根地藏
 - ・宇賀の道標
 - ・木野山の道標
 - ・荒谷の古道



伝統的街並み

上下には町の中心地に、江の川水系と芦田川水系の分水嶺となる峠があり、ここから町名がついたとも言われる。

古くから交通の要衝として、また江戸時代は天領として、地域経済の中心的役割を果たしてきた。街並みには、「旧岡田家」「上下キリスト教会」明治時代の「旧警察署」大正時代に建てられた劇場「翁座」などが残っており、白壁・うだつ・棟瓦などに、天領の風格が今も漂っている。

歴史的街並みと調和しながら、景観を活かした新しい道づくりに取り組む活動も早くから行われ、地域の人々が来訪者を案内するボランティアガイド制度なども整えられている。



上下の町並み

弓神楽

上下町井永地区に「弓神楽」という全国的に貴重な神楽が残っている。これは、地域共同の荒神祭りや、民家で行われる私的な神事などで演奏されるもので、神前に揺輪という台を据え、これに弓を結びつけ、銅拍子や笛の合奏で、弓の弦を打ち鳴らしながら祭文を唱えるというもの。



弓神楽



井永地区

この神楽は、「弓には霊力が備わっている」という古代からの観念に基づくもので、弓祈禱、神弓祭、内神楽とも呼ばれている。
かつては、広島県備後地方一円で行われていたが、現在では上下町井永地区にその伝承者が残っているのみである。

東宮侍従角倉志朗氏

「角倉志朗」氏は、一九〇三年に上下で生まれ、小学時代をここで過ごしている。その後、京都第三高等学校、東京大学と進み内務省に入省、昭和二〇年初頭に東宮侍従を務めた。氏は戦中、戦後の混乱期に、侍従として当時の東宮を陰で支え、多くの人々から厚い信頼を受けていたようである。

また仕事の傍ら、出家しないで禅の道を究める在家禅者として求道生活を貫き、晩年には、「禅筵（ぜんえん）筆録集」を著している。上下歴史文化資料館には、角倉氏と交流のあった人々の通信書簡が、保管展示されている。



旧角倉家外門

田山花袋と岡田美知代

上下出身の女流文学者、岡田美知代は若くして文才を認められ、当時の文豪田山花袋に弟子入りしている。明治四〇年に、田山花袋が発表した作品「蒲団」に登場するヒロインは、この岡田美知代がモデルであった。

上下歴史文化資料館は、旧岡田家を改装したもので、美知代の生涯とその作品などを展示するコーナーをはじめ、彼女が使用していた和室、田山花袋が岡田家を訪れたとき逗留した和室が、再現されている。



再現された岡田美知代の部屋

どうどう岩と猫地藏

井永には、「どうどう岩」と呼ばれる不思議な洞穴がある。

どうどう岩は、河川による浸食でだんだん現れてきたもので、岩面に滑らかさが少なく、浸食されたのち表面が風化され、剥奪されたものと考えられている。昔の人は、巨岩や洞穴に神が宿ると信じ、かつてはここに「岩屋荒神社」というお堂があり、地域住民の信仰対象となっていた。洞穴の断層は奥深く、ここから2キロ離れた、水永の「猫地藏」の穴と通じていると言われ、庄原市東城町の猫山にすむ古猫が、この穴をぬけて、水永で往生を遂げたという伝承も残っている。



どうどう岩



猫地藏

主な連絡先

- 府中市上下支所 0847-62-2111
- 府中市観光協会上下支部 0847-62-4990
- 府中市上下歴史文化資料館 0848-62-3999

銀の道関連ホームページ

- 歴史が薫る白壁の町 上下 <http://www.bes.ne.jp/bingo-e/midokoro/town-jyouge.html>
- みち紀行 温泉津から尾道笠岡へ 上下町 <http://www.chugoku-np.co.jp/tokusyuu/mitikikou/m020825.html>

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平18中複第150号)

平18中複第150号

大久保

2006.4



三次から約28km
大森から約95km

三次から約37km
大森から約105km

①中山一里塚跡
吉舎と甲奴の境界となる峠の頂付近に一里塚の跡が残っていたが、現在は、塚は敷に覆われ見えにくくなっている。

②宇賀の辻堂
地元では、郷地蔵(ごうじぞう)さんと呼ばれている。銀の道はこの先で「笠岡ルート」と「尾道ルート」に別れる。

③下野の道標
総領町に向かう道との交差点に残っていたと思われる道標。近年の道路改良で新しく作り直され、商店の門先に置かれている。

④上下大師堂
旧街道に面しており、町の入り口となる場所に大師堂が建立されている。今でも、地域の人々の信仰が厚く、供え物が絶えない。

⑤大黒屋道標
上下町の伝統的町並み地区の一角に残されている道標。道路拡幅工事の時、少し移動して残したという。

⑥旧角倉家の横門
この門はもともと代官所跡の門であったが、角倉家が払い下げを受けたもの。すし移動して残したという。

⑦旧郷宿跡
かつて役所の仕事を代行する「郷宿」と呼ばれる公事所があった。その名残を示す虫籠窓やうだつが残されている。

⑧天領代官所跡
幕府の天領であった上下には、代官所が置かれていた。現在は役場支所となっているが、石垣は当時のままだ。

⑨井永の一里塚
井永の古道沿いに今でも一里塚が残る。正面に見える大きな古木の根元には、「南無阿弥陀仏」の名号石が建っている。

⑩猫地蔵
庄原市東城の猫山に住む古猫が、ここで息絶えたという伝説が残し、その霊を慰めるため地蔵尊を安置したという。

⑪竹内の常夜灯
水永の峠を越えてきた道は緩やかに下りながら、小集落を縫うように進む。道沿いには今も常夜灯や辻堂が残っている。

⑫木野山の道標
木野山町の旧街道沿いに残っている小さな道標。府中という字が刻まれているのがわかる。

⑬坂根地蔵
「かさ地蔵」とも言われ、昭和の初め頃までは近在に知れわたり、多くの参拝者でにぎわっていた。

⑭荒谷の古道
木野山からの峯越えルートを下りてくると、府中市荒谷にはいる。当時の道筋が残されおり「スサノノミコト」の伝説がある。

凡例			
	銀の道(車)※1		車輛迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。

複製不許可



府中市出口町

府中市荒谷町く 福山市神辺町編

やっこの思いで坂根峠を越えると、府中市荒谷町に入り、出口町から市街地にさしかかる。府中は、古くは備後国府がおかれ、この地方の政治・経済の中心として栄えてきた。銀の道はここからほぼ平坦な道を東に進み、福山市新市町、駅家町を過ぎて神辺の町に入る。そのルートはおおむね北寄りの道を通っていたと思われる。道沿いには辻堂や地藏像、常夜灯など、古道らしい風景が随所で見られる。

- この区間の主な見どころ
- 坂根地藏
 - 六地藏
 - 別両路(わかりょうじ)の道標
 - 菅茶山の記念碑
 - 川上の梵字岩
 - 甘南備神社
 - 出口町の番所跡
 - 出口町の道標
 - 旅籠「恋しき」
 - 日本一の石灯笼
 - 元町の摩崖仏
 - 首無地藏
 - オオムラサキの里
 - 府中市歴史民俗資料館
 - 広谷の常夜灯
 - 吉備津神社
 - 新市の道標
 - 戸手の地藏堂
 - 万能倉の道標
 - 福山藩番所跡
 - 荒谷の古道
 - 荒谷の常夜灯



吉備津神社

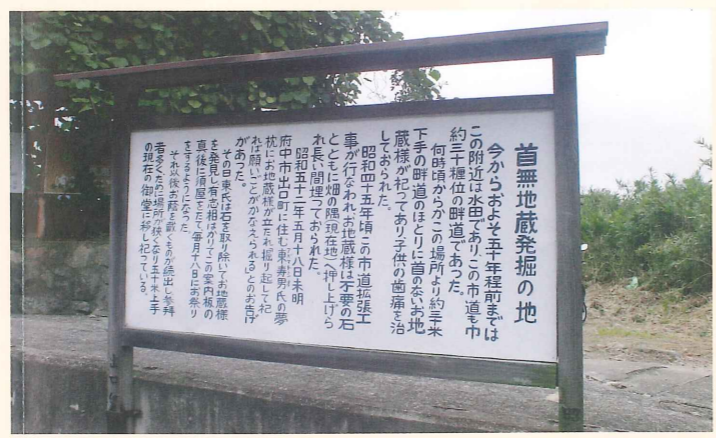
「吉備津神社」は備後一宮として参拝者も多く、別名一宮さんと呼ばれている。創建は八〇四年と伝えられるが、神社名が最初に確認できる史料は、京都八坂神社の一八八四年の記録である。境内には、一六四八年に再建された本殿(国指定重要文化財)や神楽殿(県指定重要文化財)などの建造物が、一八棟現存する。古い絵図をみると、神道系の建造物、仏教系の建造物、民家などが確認でき、神仏習合の時代を克明に描き出している。また、神社周辺の山林は、山城として整備され、神社そのものが都市であり、城郭であったことがわかる。



吉備津神社

首無し地藏さん

今からおよそ五〇年前、このあたりは水田地帯で、道路は、わずか三〇センチの中あぜ道があるに過ぎなかった。この畦道のほとりに、首のない地藏さんがまつられており、子どもの歯痛をなおしてくれるという評判であった。いつしか地藏も忘れられ畑の隅に追いやられ埋もれてしまった。昭和五二年に、ある人の夢枕にこの地藏さんが立ち「掘り起こしてくれば願いをかなえてやる」というお告げがあったそうだ。そこで有志が協力して地藏さんを掘り起こし、もとの場所へ安置して、毎月十八日にお祭りをし続けていた。お陰でご利益を得る者が続出し参拝者が増えてきた。その場所では狭くなったため、現在のお堂の所へ移動し祀ったという。



首無し地藏発掘の地

金比羅とは何か

金比羅は、サンスクリット語の「グンビラ」からきた名前だ、ガンジス河に棲むワニを神格化したものと言われている。これがやがて仏教に取り入れられ、釈迦が修行時代を過ごした王舎城内にある「ヒフラ山」の守護神とされた。この山が、ゾウの鼻に似ていることから「象頭山」とも呼ばれていたと言います。四国の金刀比羅宮は海上の守護神、海難救済の神として全国に知られているが、最初は松尾寺というお寺の守り神として勧請されたものに過ぎなかった。金比羅信仰は海上交通の広域化と共に、瀬戸内の水先案内を業とする人々を通じて全国に広がり、江戸の町では、商売の神様あるいは防火の神様として庶民に信仰されていくようになる。また、金比羅は水の神、雨乞いの神としての側面もあり、農村地帯へも深く浸透していった。



甘南備神社前金比羅常夜灯



府中市中心街

オオムラサキ

国蝶オオムラサキは、幼虫の時期にはエノキの葉を食べ、成蝶になるとクヌギやコナラの樹液を吸う。羽根を広げた成蝶の大きさは、オスが一二センチ位、メスは一三〜一五センチ位もあり、毎年六月中旬から八月上旬にかけて、その美しい姿を見せてくれる。



オオムラサキ 日本レッドデータブックに希少種として記載されている。



オオムラサキが生息する僧殿地区



オオムラサキの里

- 主な連絡先
- 府中市役所 0847-43-7111
 - 府中市教育委員会 0847-43-7176
 - 府中市歴史民俗資料館 0847-43-4646

- 銀の道関連ホームページ
- 石州道 銀の道 街道ガイド <http://www.fukuyama-fuchu-kouiki.jp/miti.html>
 - みち紀行 温泉津から尾道笠岡へ 新市町 <http://www.chugoku-np.co.jp/tokusyuu/mitikikou/m020908.html>

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平18 中復 第150号)



上下から約 20km
大森から約 125km

<p>①坂根地蔵 「かさ地蔵」とも言われ、昭和の初め頃までは近在に知られ、多くの参拝者でにぎわっていた。</p>	<p>②荒谷の古道 木野山からの峠越えルートを下ると、府中市荒谷にはいる。当時の道筋が残され「フサノオノミコト」の伝説がある。</p>	<p>③別両路(わりよう)の道標 その名の通り、石州街道と雲州往還の別れ道にあたり、現在も地名として残されている。</p>	<p>④管茶山の記念碑 この地を訪れた江戸時代の詩人「管茶山」が、別両路の橋台となっている大きな岩を見て、この詩を詠んだ。</p>	<p>⑤川上の梵字岩 お堂の後の大岩に彫られている梵字は「不動明王」を表している。山伏が供養のため彫ったという言い伝えが残っている。</p>	<p>⑥甘南備神社 府中では唯一の延喜式内社で、「コシロヌシ・オオクニヌシ・スクナヒコナ」の3柱を祭神とする。</p>
<p>⑦出口町の番所跡 江戸時代、ここに福山藩の郡奉行支配下の口留番所があった。他領からの通行人の監視や積み荷の徴税を行っていた。</p>	<p>⑧出口町の道標 荒谷から降りてきた道はここで東に折れ、府中の中心部へと向かう。道標には石州道という文字が見える。</p>	<p>⑨旅館「恋しき」 府中は、備後の国府がおかれ交易の中心地であった。「恋しき」は、多くの旅人を迎え入れてきた古い旅館の一つ。</p>	<p>⑩日本一の石灯ろう 東町の金比羅神社には、傘の広さが四畳半もある、「日本一の石灯ろう」と呼ばれている大きな石灯ろうが建立されている。</p>	<p>⑪元町の摩崖仏 地元では「摩崖仏」と呼ばれ、岩壁に仏像が彫られている。古い街道のほとりにはこうしたお堂が多く見られる。</p>	

凡例

	銀の道(車)※1		車輛迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地蔵・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。※2 銀の道と思われる小道で、道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。

「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。

<p>⑫広谷常夜灯 道はここで2つに分かれる。北へ向かう道は「吉備津神社」へつながり、もう一方の道は新市の中心部へと向かう。</p>	<p>⑬新市の道標 新市の一宮参道口に残された道標。「石州道」という字が確認できる。</p>	<p>⑭戸手の地蔵堂 古い街道の脇には、地蔵様を祭った、辻堂が残っており、今でも地域の人々が大切にしている。</p>	<p>⑮万能倉の道標 石州道と東城方面へ向かう道の分岐点に、道標がある。「西府中道・東岡山道」と表示されている。</p>	<p>⑯福山藩番所跡 神辺町道上の岡神社付近に、番所跡を示す石柱が残っている。</p>
--	--	--	--	---

複製不許可

銀の道 探訪マップ ⑫



笠岡市東迫

福山市神辺町く 笠岡市本町編

石州道は、神辺町の国分寺付近で山陽道と出会う。銀の道ルートは、ここからいくつものコースが考えられる。古文書では、井原市高屋まで銀が運ばれていたという記述が残っている。このマップでは、山陽道との交差点を直進して、福山市坪生を経て笠岡に入るコース、山寄りの道を進み、高屋から南へ下り笠岡に向かうコースをとりあげた。これら二つのコース上にも、辻堂や常夜灯など、古道の要素が多く見られる。

- この区間の主な見どころ
- ・万能倉の道標
 - ・福山藩番所跡
 - ・国分寺
 - ・石州道の道標
 - ・康塾
 - ・菅茶山記念館
 - ・神辺本陣
 - ・藩境の石
 - ・地神さん
 - ・高屋の町並み
 - ・中国地方の子守唄発祥地
 - ・坪生の番所跡
 - ・嫁いらず観音
 - ・坪生の古道
 - ・茶店跡
 - ・坪生の古道
 - ・銀山西の堂
 - ・地神の五角石柱
 - ・井戸平左衛門墓所
 - ・笠岡代官所跡
 - ・カブトガニ博物館



中国地方の子守唄発祥の地

「ねんねこしゃりませ」の子守歌は、昔から高屋地域で歌われてきた。この歌を聞きながら育った若き音楽家上野耐之は、昭和三年、当時国内では大作曲家であった山田耕筰のもとを訪れ、この歌を披露した。山田耕筰は「中国地方の子守唄」と題して発表した。間もなくイタリアに留学した上野耐之は、ミラノ放送局を通じて「日本の子守唄」としてこの曲を紹介し、やがて日本全国に知られ評判となった。



中国地方の子守唄発祥地

おつぼうさん



坪生の五輪塔

石州道が山陽自動車道と交わる場所から、自動車道に沿って西へ五〇〇メートルばかり進んだ所に、「おつぼうさん」と呼ばれる五輪塔の墓が残されている。これは平安後期から鎌倉時代にかけて、坪生盆地を開墾し経営した坪生氏代々の墓と伝えられるが、地方豪族にしては規模が小さく、主な石塔はいずれかの地に移したのではないかと考えられる。「坪生村郷土史」には『坪生の地頭職の墓ならん』と記されている。鎌倉時代の様式を示す石塔群は、貴重である。



威徳寺

石見代官として活躍した井戸平左衛門は、大森から遠く離れた笠岡の地で亡くなっている。彼が死亡した原因としては、二つの説がある。一つは、飢饉に際して幕府の許可を待たず、代官所の米蔵を開いて人々に米を配ったため、その責任を問われて切腹したというもの。もう一つは、平左衛門は六〇歳で代官に任命され、わずか二年の在任期間だったが、その激務がたたって病死したという説。一般的には病死説が有力とされている。彼の墓は笠岡市内の威徳寺の境内にあり、大切に管理されている。

井戸平左衛門



銀山地区の古道

カブトガニ

カブトガニは、2億年前から変わらぬ姿で現在も生き続けており、「生き化石」といわれている。笠岡湾は、日本で唯一のカブトガニ繁殖地として、国の天然記念物に指定されている。



カブトガニの繁殖地



カブトガニ博物館内の展示

笠岡には、カブトガニの生息に必要な産卵のための砂浜と、幼生の生息する干潟が残っており、毎年産卵の季節になると、今なおその姿を見ることが出来る。またここでは、古くから市民による調査・飼育・清掃活動など、地域をあげたカブトガニの保護活動が取り組まれている。笠岡湾のほど近くに、笠岡市立カブトガニ博物館があり、カブトガニの生態などを学ぶことができる。



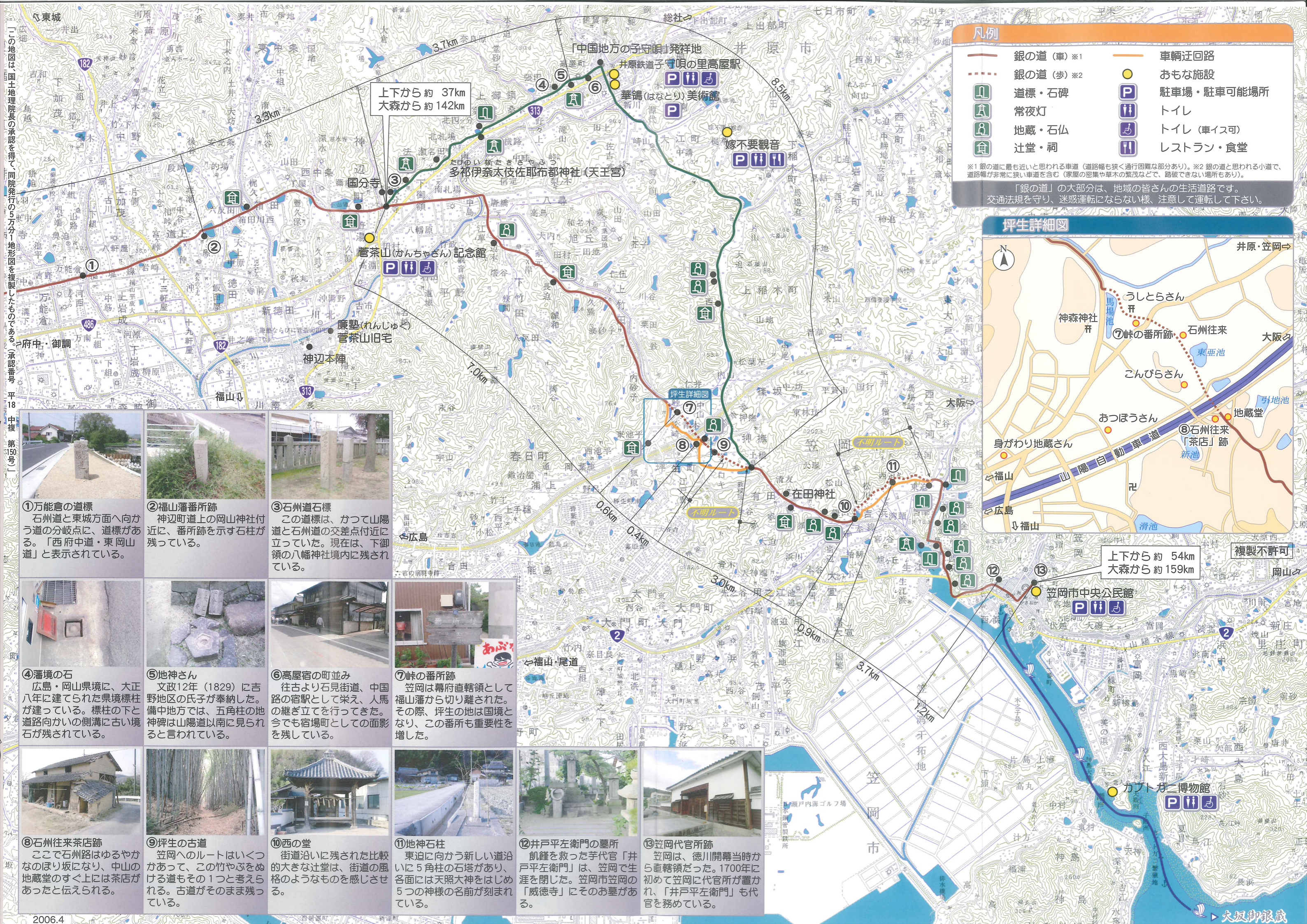
カブトガニ博物館

主な連絡先

- | | |
|-----------|--------------|
| 福山市神辺支所 | 084-962-5000 |
| 井原市役所 | 0866-62-9500 |
| 笠岡市役所 | 0865-69-2121 |
| 井原線沿線観光連盟 | 0866-62-8850 |
| 菅茶山記念館 | 084-963-1885 |
| カブトガニ博物館 | 0865-67-2477 |

銀の道関連ホームページ

みち紀行 防府から井原へ 井原
<http://www.chugoku-np.co.jp/tokusyuu/mitikikou/m020915.html>



凡例

	銀の道(車)※1		車輛迂回路
	銀の道(歩)※2		おもな施設
	道標・石碑		駐車場・駐車可能場所
	常夜灯		トイレ
	地藏・石仏		トイレ(車イス可)
	辻堂・祠		レストラン・食堂

※1 銀の道に最も近いと思われる車道(道路幅も狭く通行困難な部分あり)。
 ※2 銀の道と思われる小道で道路幅が非常に狭い車道を含む(家屋の密集や草木の繁茂などで、踏破できない場所もあり)。
 「銀の道」の大部分は、地域の皆さんの生活道路です。
 交通法規を守り、迷惑運転にならない様、注意して運転して下さい。

坪生詳細図

井原・笠岡⇄

大阪⇄

福山⇄

福山⇄

山陽自動車道

滑池

引池

地蔵堂

新池

「茶店」跡

石州往来

おつぼうさん

身がわり地藏さん

こんぷらさん

うしとらさん

7 峠の番所跡

石州往来

東池

馬場池

神森神社

井原

大阪

福山

福山

復製不許可



① 万能倉の道標
 石州道と東城方面へ向かう道の分岐点に、道標がある。「西府中道・東岡山道」と表示されている。



④ 藩境の石
 広島・岡山県境に、大正八年に建てられた県境標柱が建っている。標柱の下と道路向かいの側溝に古い境石が残されている。



⑤ 地神さん
 文政12年(1829)に吉野地区の氏子が奉納した。備中地方では、五角柱の地神碑は山陽道以南に見られると言われている。



⑥ 高屋宿の町並み
 往古より石見街道、中国路の宿駅として栄え、人馬の継ぎ立てを行ってきた。今でも宿場町としての面影を残している。



⑦ 峠の番所跡
 笠岡は幕府直轄領として福山藩から切り離された。その際、坪生の地は国境となり、この番所も重要性を増した。



⑧ 石州往来茶店跡
 ここで石州路はゆるやかなのぼり坂になり、中山の地藏堂のすぐ上には茶店があったと伝えられる。



⑨ 坪生の古道
 笠岡へのルートはいくつかあって、この竹やぶをめぐる道もその1つと考えられる。古道がそのまま残っている。



⑩ 西の堂
 街道沿いに残された比較的大きな辻堂は、街道の風格のようなものを感じさせる。



⑪ 地神石柱
 東迫に向かう新しい道沿いに五角柱の石塔があり、各面には天照大神をはじめ5つの神様の名前が刻まれている。



⑫ 井戸平左衛門の墓所
 飢饉を救った芋代官「井戸平左衛門」は、笠岡で生涯を閉じた。笠岡市笠岡の「威徳寺」にそのお墓がある。



⑬ 笠岡代官所跡
 笠岡は、徳川開幕当時から直轄領だった。1700年に初めて笠岡に代官所が置かれ、「井戸平左衛門」も代官を務めている。

この銀の道探訪マップは、「銀の道交流会&フィールドワーク」に参加された皆さんのご意見をもとに制作しました。



銀の道交流会&フィールドワークは、

- 大田市大森町～温泉津町
- 美郷町～飯南町
- 三次市布野町～吉舎町
- 三次市甲奴町～尾道市御調町
- 尾道市御調町～尾道市久保町
- 三次市甲奴町～府中市木野山町
- 府中市出口町～笠岡市笠岡

の7ブロックで開催され、のべ170人以上の方が参加されました。

各ブロックでは参加者全員が実際に現地を踏査し、ワークショップ方式で議論を積み重ねてきました。限られた時間での作業のため、すべての情報を収集することができず、見落としした資源がまだまだあるかも知れません。しかし、この探訪マップには、沿線の町から参加された皆さんのあつい思いが込められています。

この探訪マップを片手に、ぜひ銀の道を探訪してみてください。

マップ活用法

- このマップは国土地理院の5万分の1地形図を下地に、銀の道を12のブロックに分けて紹介しています。
- 銀の道本来の古道は各種事業でなくなったり、コースが不明であったり正確につかめておりません。このマップに示したルートは交流会に参加された地元の方々のご意見をもとに、最も近いと思われるコースを設定しております。
- このマップは銀の道をゆっくり訪ね歩こうとする方、地域学習参加者の方への参考資料として制作しました。読みにくい地名などはできるだけフリガナをつけましたが、不明な点は各地の役所や案内指導者の方に尋ねてください。
- マップに掲載した情報は制作時のものです。
- このマップの内容等に関しては、次のところへお問い合わせください。

「銀の道交流会事務局」
TEL 0855-87-0775 (Fax兼用)

企画 特定非営利法人 中国・地域づくりハウス
監修 銀の道交流会&フィールドワーク参加者の皆さん
制作発行 国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所
728-0011広島県三次市十日市西6-2-1
TEL 0824-63-4121 FAX 0824-63-0210